あかし

1962. 23号

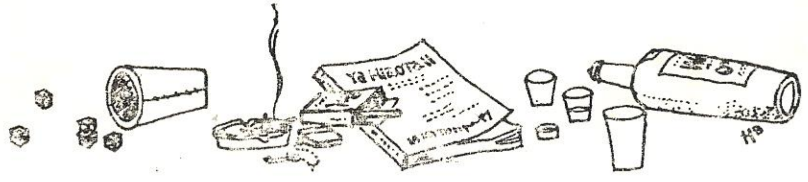
(神代寺境内にて………)

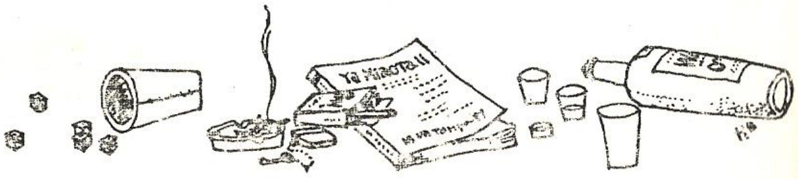
あかし23号

もくじ

欧米の味覚 …… 浅羽正三 …… 1
回想のAKS（その二） …… ひさだ・たろう …… 8
あの頃の"アカシ"界隈 …… 中田与厚 …… 13
ある会話 …… 山脇享 …… 15
相模工場について …… 「あかし」編集部 …… 19
季節の栞（すゝき） …… 小川翼 …… 24
詩・夏の終りに …… やまだ・きみこ …… 25
因果な稼業と来たもんだ …… 中島公 …… 27
とに角考えてみて下さい …… 三輪修三 …… 30
猫は哀し …… 河野健雄 …… 34
オートメーション・ワイフ …… 漆谷章 …… 38
アンケートまとまる …… 明友会「アカシ」編集委員会 …… 42
詩・無縁仏ー墓石の列ー …… 安斉真司 …… 47
編集部企画ー家庭訪問ー …… アカシ記者
橘正行氏宅 …… 49
新沼武氏宅 …… 52
詩・横浜のうた …… 安斉真司 …… 57
音の雑記帳 …… 長島保雄 …… 59
北海道旅行記 …… 重松保弘 …… 62
詩・ゆうぐれ …… 恭女 …… 65
山小屋にて …… 森井時夫 …… 67
僕とギター …… 佐藤隆則 …… 69
色彩 …… 小川翼 …… 71
友人 …… 土岐武 …… 72
雲の話 …… 島倉昌二 …… 74
後楽園の土を踏んで …… 野球部30番 …… 77
アカシ・ダンス・クラブ …… 80
のぼろう会 …… 秋沢昇 …… 81
あかし天狗倶楽部開催記 …… 81
人事往来 …… 83
編集後記 …… 84

表紙　安斉真司
カット　アカシ美術クラブ





欧米の味覚　浅羽正三

〇アメリカ人は味盲であるということ

アメリカは食べ物がまずいということでは定評がある。しかし、どんな風にまずいのか、また何故まずいのか、私はアメリカに渡る前から、その点で非常に興味を抱いていた。ロスアンゼルスに着いた夜、そこの食堂で私は早速ビフテキを注文した。御存知のようにアメリカの代表的御馳走はビフテキである。

さてテーブルに運ばれたビフテキを見ると仲々相当なものである。厚さは四、五糎もあり、大きさも週刊紙の半分位はある。ナイフを入れると、充分軟らかで赤い血が滲みで来て、いかにもおいしそうである。塩と胡椒を振りかけ、これにカラシを塗って口に入れてみる。「ハハア。これだな。」と心の中で分ったような叫声を上げた。たしかに軟かいことは軟かい。しかし牛肉らしさがない。日本で食べる牛肉はもっと硬いことはあっても、噛んでいると牛肉らしい味が出てくるものであるがこれは何んとしてもこのらしさがない。たゞゴム状のものに塩味をつけて食べているようなものである。牛肉らしさを形成する複雑な有機化合物が欠けているのであろう。冷凍を長くつゞけていると、こうなるのか、肉その

ものが元来まずいのか分らない。

二世のハラダさんは仕事のことで度々日本に来て、日本のビフテキの味を知っている方なので、遠慮気味に聞いてみた。

「どうもアメリカのビフテキは旨いとは思えないですね。スエヒロの方が数段上等だと思いますがね。」

ところが、ハラダさんの返事は誠に意外であった。

「いや、アメリカの方がずっとうまいですよ。第一ね、浅羽さん、ビフテキはアメリカが本場ですよ。これが本場の味ですよ。アメリカで食べる鮨が日本のようにうまかったら、おかしな話でしょう。やはり慣れの問題ですよ。」

「なーる程。」私はハラダさんの言うことには理屈があると思って、大いに感心した。しかし、心の中では「まずいものは、やっぱりまずい。」と反駁せざるをえなかった。

その話を社長にしたら、「アメリカ人は生れつき味盲なんだよ。」と言われた。味盲というのは新造語かも分らない。色盲に対する味盲であって、要するにまずい物もうまい物も区別がつかない人のことである。

生れた時から、あんなビフテキばかりを食べていると、あれがやっぱり一番うまいと思ってしまうらしい。しかし、アメリカ人が鮨にバターを塗りつけて、「日本のよりうまい。」と言ったら我々が大笑いするであろう事を思うと、一概にそう割り切ってしまって良いのだろうかとも、思ってみたりした。

それはさておき、ビフテキにこりこりした私は、翌日はローストチキンを註文してみた。チキンなら量も少ないし、ローストしてあれば馨りもあることだろうという心算である。ところが、皿に乗って出て来たのを見てみれば、チキンと言うも愚かな代物である。鶏が皿に乗っていると思えば間違いない。そして、皿一杯に小山のように乗っているチキンはボソボソとオが屑のように味がない。いくら塩、胡椒を振りかけようが、味の素（アメリカ製はアクセントという商品名）をかけようが、オが屑はオが屑でしかない。第一よくあれだけの量を食べるものだとアメリカ人の胃袋にもあきれてしまう。

アメリカの東海岸、特にメイン州は魚貝類の産地として有名である。従ってボストン、ニューヨークなどには有名な魚料理（シーフード）の店がたくさんある。

肉類で閉口したので私はこの魚料理を食べるのが楽しみであった。まずアメリカ人が最も好むロブスター（えび）

を註文してみた。私はあえて伊勢えびとは書かない。ロブスターはえびはえびでも、伊勢えびではなく日本の田圃にいくらもいるザリガニの大親分である。体長四〇糎もある奴が大きな鋏を横たえて二つゴロリと皿の上に乗っているのを、皆さん想像してごらんなさい。食慾はまず半減すること疑なしです。そして、テーブルには鋏を割るために鉄製のクルミ割りみたいのが、いかめしく置いてある。肉は締まりがなく、だらしなく軟かで大味で、えび特有のうまさがさっぱりない。店の水槽の中でピンピンしているのを直ぐ塩ゆでにするのだから、これは冷凍のせいではなく確かに大きくなり過ぎたせいである。

魚料理の中で比較的うまいものに生(なま)ガキと生ハマグリとがある。いづれも、生のまゝ氷の上にのせて運ばれて来る。これにトマトケチヤップとレモン汁をかけて食べるのである。しかし、味は広島の生ガキに及ぶべくもない。たゞ、ブルーポイントと言う小柄の生ガキが匹敵すると言うところであろうか。生ハマグリはやや泥くさいが、日本人の嗜好には合っている。

では「アメリカで一番うまいものは」ときかれたら、私は躊躇なく「オレンジジュース」だと答えたい。オレンジの新鮮なのを絞って冷やしたのを、朝食の時に飲むのは実にうまい。ビタミンCのエッセンスと言う感じである。「ではその次は」と聞かれると、一寸返事に窮してしまう。「アメリカのアイスクリームはうまい。」とよく言われるが、あの程度だったら日本にだって、いくらもある。（たゞし、量は三倍位ちがうけど）しかし、こうしたアメリカのうまくない食べ物も一ケ月も食べ慣れると、余り苦にならなくなるから、不思議である。だんだんと味盲になってゆくらしい。

○アルプス料理は乙なものであること

スイスの東部、南部、西部はアルプスの連峯がそびえて、オーストリヤ・イタリー・フランスに接している。

この地方の郷土料理にはなかなか珍らしいものがある。ビュンドナー・フライシュ（干し肉）は牛肉や羊肉を紙のように薄く切って天日で干したものである。ベーコンやハムよりもっとあっさりした塩味で、ビールのつまみにすると実にうまい。

フォンデューは鍋に粉チーズを入れて、アルコールランプで煮たたせた中に、パン切れを長いフォークに刺し

てドップリつけて食べるのである。はじめは、チーズの匂いが強くて閉口したが、食べなれてみると仲々に捨てがたい味である。パン切れの代りに肉切れを用いるのもある。

オーストリヤのチロル地方にかけては、ビエンナ・シユニッツエルがあり、日本のトンカツそっくりであるのには驚いた。日本が真似したのかも分らない。もっとも本場のは仔牛の肉を使うのである。

イタリヤのカンパーリと言う飲み物がスイスにも入って来ている。真紅の濃い液をコップに1/5位入れて、炭酸水をその上にそそぐと、実に美しい赤い色のカンパーリができ上る。味は強い苦が味のある中に、ホロ甘さがあり、アルコール分も多少含まれている。胃の悪い時に医者がくれる薬のような感じもする。「合成した有機化合物ですよ。」と言われて、初めはちょっと嫌いであったが慣れてみると差程でもなく、これを飲みながら干し肉を食べると仲々乙なものである。私はチューリッヒで独りでいる時、もっぱらこれを愛飲愛食してエトランゼ気分を味っていた。そして日本の飲み物にはない強い苦が味が、私をしばしば望郷の思いに馳りたてるのである。

○フランス料理にもまずい物があるということ

「パリに来て立派なホテルに泊ったら、パリの味が分りませんよ。」と堯(たかし)さんはご親切に私のために、小さなホテルの屋根裏の部屋を予約しておいて下さった。

「英語は通じるでしょうネ。」と念を押したら

「サアー、分りませんよ。」とまことに心細い返事である。大体フランス人は英語を話そうとしないし、旅行者に特に親切にしてやろうという気持もないから、旅行者は戸迷うこと限りない。メニューも勿論フランス語である。

ホテルの二人乗りというガタガタのエレベータの扉をゴトゴトあけて、屋根裏からのんびり一階の食堂に下りてみた。フランス人が五、六人食事をしているが、誰もエトランゼの日本人に注意しようとはしない。旅行者だからと親切にしてやろうと言う気もない代りに、人種的偏見もないのがフランス人である。

空腹ではあるがメニューはフランス語でチンプンカン、英語でボーイに聞いてもチンプンカンである。仕方がないので、豚肉と書いてある所の一番安い料理を指して示した。ボーイはちょっと変な顔をして念を押すから、ここぞとばかり落ちつき払って「ウイ」とそり返ってみた

ものの、その実、何が出てくるか皆目わからないのである。しかし、まあフランス料理は大体うまい物と相場がきまっているから安心していた。料理の名は確かフィンツと書いてあったようである。

やがて、ボーイが鍋を持って来て、私の前のスープ皿に半分程入れてくれた。豚肉のスープの様である。ガツガツしては日本人の体面にも係わるので、空腹は顔にも出さず、私は悠然とスプーンを取り上げて口に運んだ。ボーイが傍から「いかがですか」と聞いた様子である。「ウム……」と私は声も出ない。これはまた何んと臭い料理であろう。豚の糞を一諸にして煮たような臭いである。あらためて、皿の中を見直してみると、豚の腸と肝臓のようである。腸の内壁には理科の教科書にもある絨毛という奴が一面に附着してウネウネとなびいている。その色は丁度アルコール漬けの人体の様な灰褐色である。日本の傑作に「クサヤの干物」という臭いのがあるが、あれと好一対である。胃袋がムカムカして来て今にも口の方へ逆戻りしそうである。しかし、いやしくも日本の男子一たび志を立てて料理を註文したからには、一匙二匙で放り出すわけには行かない。私はウンウン言いながら絨毛を噛みビールと一諸に胃袋に流しこんだ。冷汗が出て来る。どうも我慢ができなくなった。降参、降参。日本人も糞くらえとスプーンを放り出した。

「もういいよ。」と言ったら、ボーイは日本語が分ったのか分らないのか、黙って皿を片附けて行った。あとで堯さんにその話をしたら、「ああ、あれは我々には食べられませんね。」と言っていられた。よほど悪名高き代物らしい。

パリにピエ・デ・コッション（豚の脚）という有名な料理屋があり、その名の通りの料理がある。堯さんが「食べますか」という。日本人の口には合いませんよ、という事らしい。「とにかく、食べてみますよ。食べなきゃ話の種にもなりませんから」という訳で私だけが「豚の脚」を食べることに相成った。皿に乗って出て来たのを見ると、正に「豚の脚」である。第一関節？から切り落して長さ三十糎余、先端には蹄までチャンと付いていて、色は北欧美人の肌のように白い。

ナイフを入れてみると、実に軟らかく、大部分が白い脂肪の塊りで、その間に僅かに赤い肉がある。口に入れてみると、ドロドロした脂そのものでラードをほほばった

ように、口中が油だらけと言う感じである。どうも旨いとは思えない。

案外、「いける」と思ったのはカタツムリ（エスカルゴ）である。大きなスープ皿に日本で普通みかける位のカタツムリが二十個位殻のまま、トマトジュースで煮たような具合で食卓に出された。揚子を刺して殻からクルクルと引き出して食べるのである。カタツムリと言うと直ぐにあのネバネバした軟体を想像しそうであるが、案外とシコシコしていて、バイ（東北地方の）とかタニシとかいうような貝類に近い味である。よく見ると、憐れに縮まってはいるがつのもありやりもあり斧足もある。これをつっつきながらビールを飲むのはチョイと乙なものである。

〇スエーデンの料理は日本人の口に合うということ

「これがうまいんだよ。」と社長はストックホルムに着くと直ぐ小えび（シュリンプ）の塩ゆでを註文した。大きさは八糎位で皿に山盛りにして出される。指で皮をむきながら食べるのであるが、なるほど美味である。日本ならさしずめ二、三匹位を大きな器にチョンと乗せて来るのであろうが、外人の胃袋は余程大きいと見えて山盛りである。片端からムシャムシャ平らげるとえびの殻が忽ち食卓に山積みとなる。同じシュリンプでもアメリカのとはこうも違うかと不思議に思う位にうまい。

日本人が誰も讃美するスモーク（燻製）したさけも北欧の美味である。北海のさけの赤い肉は殆んど生に近く薄い切り身は口に入れると、かすかに塩味があって軟かい。脂っこい食べ物ばかりの欧米の料理の中にあってこのあっさりした味は珠玉のように思われるのである。

スエーデンはこのほかに魚料理が発達していて我々を楽しませてくれるが、いろいろな魚の酢漬けは大阪のバッテラの味を思い出させるのに充分である。

チーズはデンマークが本場であるが、スエーデンでも色々のチーズを味うことができる。青カビの混ったチーズは見た眼にも気味が悪いし、だいたい青カビを食べるのかと思うと恐ろしい気がする。

「ペニシリンを飲んでるようなものですよ。」とスエーデンの人が笑いながら奨めてくれるのに、勇気を出して食べてみると、塩味が相当強く案外うまいのに驚かされた。しかし、中には臭くて臭くて堪えられないチーズが

あるとのことだったので、それかとも思ったが、そうでもなさそうである。味覚の点で日本人に近いスエーデン人が、どうしてこんな悪臭を好むのかどうも不思議に思ったが、タクアンをスエーデン人が食べた時の顔を想像したら、少し分った様な気がした。

これを除けばスエーデンの料理はどれもこれも我々にはおいしく食べることができる。

○日本の水はうまいということ

日本に帰ってみると、日本は人が多くて湿度が高いなあと感じた。欧米の空気は少くとも私のいる間は非常に乾燥していたので、いつも渇を覚えるのである。そんな時はいつも鉄管ビールを一杯グーと飲みたいなあと思うのであるが、天は二物を与えずというが、欧米の水は至ってまずい。

見かけは透明でもあり、消毒もしてあるのだろうが、爽やかな味がなくて泥くさいのである。ニューヨーク、ロンドン、ハンブルグ、いずれも然り、パリに至ってはひどい硬水なので飲むことを止められた位である。スイスがやや良い位のものである。とにかく、いずれの国の川を見ても濁っていて日本のような清澄な流れは稀である。アメリカの川は言わずもがなテムズ川・セーヌ川・ライン川・ドナウ川など我々の耳に親しい川はどんなに美しいかと思っていたが、実際はがっかりするばかりであった。アルプスのユングフラウの下を流れる川でさえ黒く濁って清流とは言いがたい。こうした川から水道を引くのだから水のまずいのも無理はないであろう。従ってレストランでは日本のようにお冷を出すという習慣はないようで、頼めば炭酸水か精製した水を一升瓶に入れて持ってくる位である。普通はコカコーラ、食事中はビールかブドウ酒である。

私が水質の良い横浜に住んでいるせいかもしれないが清冷な水をコップ一杯飲みたいという欲望は帰国するまで終始変らなかった。家に戻って氷の入ったコップのお冷をゴクリゴクリと飲んだ時に、私は日本に戻って来たのだということを急に、しみじみと感じた次第である。

× × × × × ×

回想のＡＫＳ（その一）

ひさだ・たろう

はじめに——病間回顧

去年の春、私は胃潰瘍の手術をうけて、病院生活一カ月あまり、その後自宅で二カ月療養、そして例年以上に湿度の高かった東京の暑さを避けて箱根に一カ月を過した。生来健康に恵まれた——と思っていた——私にとっては全く思いがけない出来事であった。すず風がたつ頃になって漸く役所へ顔をだすようになったが、当分は無任所役で、専ら病後の身をいたわる生活がつづいた。これは私の五十年の生涯に初めての経験で、何か身体に大きな孔でもあいたような感じである。先頃亡くなった俳人西東三鬼に次の句がある——

〝切りすてし　胃の腑恋しや　秋の暮〟

今までの私は、どちらかというといつも前向き一方でよかれあしかれあまり過ぎ去ったことを心にかけない方であった。それがどうだろう。なすこともなく病床に身を横たえていると、しきりと過去の思い出が脳裏をかけめぐるのである。丁度今まで一途に川下めざして流れていた谷川の途中に突然新しいダムができて川の水がせきとめられ、そのバック・ウオーターが次第に川上へ川上へとさかのぼってゆくのに似ている。去年の病気は、私の人生の時の流れの中に思いがけないダムをつくった。

これはしかし、あるいは私の五十という年令のさせるわざかもしれない。そこえたまたま病気というアクシデントが重なったと考えるべきだろうか。先日中央公論を読んでいたところ、桑原武夫・池島信平両氏の対談のなかに、「近頃、文学より歴史に心をひかれるようになったのは年令のせいだろうか」という意味の言葉が目につ

いた。私もどうやら古いものに心が向かう年輩になったのかもしれない。

◇　◇　◇

近頃、所用で東大へ行く機会があると、私はしばしば学生時代に通いなれた呑喜（のんき）というおでんやののれんをくぐる。店の中の古びた調度、客にへつらわぬ応待ぶりなど三十年前と少しも――決して誇張ではない――変らないたたずまいである。その壁に私と同年輩のK教授の筆になる〝鳥倦飛知還〟という文字が掲げてある。思うに私も漸く飛ぶに倦んできたのであろうか。

そういえば、近年、中学や高等学校、さては大学時代のクラスメートの集りがしきりである。学窓を離れて三十年、年頃の子女を持つ年輩になって、よき縁談もがなという下心もあるかもしれない。しかしこうした同窓会の空気には、多分に旧友とともに自分達の青春の日の思い出を偲びたいといった感概がこめられている。まことに故旧忘れうべきである。

去る五月六日、東京会館で明石前社長を偲ぶ七回忌の会食会が開かれて、私もお招きをうけて席に列なった。久しぶりで懐しい諸先輩にお目にかかり、親しく前社長についてのさまざまな思い出話を伺っているうちに、私自身も前社長の指導のもとに明石で過した十二年間を回想して、しばし深い感概に浸ったのであった。

終戦まもない頃、〝わが青春に悔なし〟という映画があった。わが国未曾有の激動期に遭遇した私の青春に果して悔があったかなかったかは簡単には判断できない。しかし学窓を出てから十二年間、前社長から親しくうけた薫陶はエンジニアとして、また社会人としての私の人間形成に大きな感化を与えたことは疑いをいれない。「不遇」という言葉は良師に遇わない不運を意味するそうであるが、私の明石に勤めた幾年月は、良き師をえてまことに充実した生活を送りえたことを感謝しているのである。

◇　◇　◇

このような心境にあるところへ、たまたま浅野編集子から「あかし」に何か思い出話を書けとの勧めをうけたのである。同誌は毎号届けて頂いて、最近の会社の発展とともに社員諸兄のはりきりぶりを知って、まことに懐しくまた心強く感じていた折柄である。二つ返事で何か書いてみましょうと引受けてみたものの一向にペンが進

まない。昔はこんなでもなかったがと思うのだがどうやら、役人になってからすっかり頭といっしょに筆まで固くなってしまったのだろうか。

かって役所のある先輩が次のような訓えを垂れてくれたことがある――「講演や寄稿を頼まれた場合、何か一つ面白いことを云ってあっといわせてやろうなどと考えるのは、役人としてはまだかけだしである。言っても言わなくてもいいような何の変哲もないことを、もっともらしく平気で喋れるようになって、はじめて一人前の役人だ」と。私は今、何とか役人臭をはなれて、自由に懐しい明石時代の回想を皆さんに語りたいと思うのであるが、もし私の意に反して文章が固苦しく内容が面白くなかったら、どうやら私も一人前の役人になったらしいということにしてお許しをねがいたいのである。

◇　◇　◇

どうもえらく前置きがながくなってしまった。こんな要領の悪いことでは、おそらく気の短い前社長の一喝をくらうことだろう。急いで本文にはいることにしよう。

昭和十六年一月一日現在

先日家の中の書類を整理していたところ古い明石製作所職員名簿がでてきた。昭和十六年一月一日現在のものである。もっと古いのがないかといろいろさがしてみたがついに見当らなかった。戦災やたびたびの引越で書類も多くは散逸してしまったなかで、これだけでも残っていたのはむしろ不思議なのかもしれない。その後塚原重役にこれをお見せしたところ、今まで見たことがないといって非常に興味を示された。会社にはこの種の記録が残っていないのだろうか。

この職員名簿（残念ながら現場の人ははいっていない）によると、当時の本社および工場の職員数は、重役を除いて百十六名である。昭和十一年に今の鮫州の工場ができてから五年を経て、会社の体制もほぼととのった頃であろう。当時の常勤の主な幹部は、名簿によれば、代表取締役明石和衛、常務取締役鈴木鬼一、支配人佐藤礼吉、販売主任島助七郎、会計庶務主任榎村静（以上本社在勤）工場長明龜之助、材料主任戸張勝五郎、第一製造部長渡辺清、工作主任川口鉄三郎、工作事務主任佐藤運太郎、第二製造部長久田太郎、工作主任斉藤益太郎、設計主任宮田繁志、検定主任九里尚一といった顔ぶれになってい

る。このうち何人かがすでに故人となっておられることは、まことに感概無量である。

当時本社（丸ノ内仲七号館）には、別格として医療器械部があり、私もかりだされてイオン発生装置などの手伝いをしたものであるが、名簿には本多登さん、安沢和子さん（現田辺夫人）等八名の部員の名が見える。

◇　◇　◇

所蔵の焼残りアルバムのなかに昭和十六年一月一日に工場の前でとった記念写真がある。文中に挿入したのがそれである。サインは特にお願いして幹部の皆さんから頂いたものであるが、思い出しても不思議な位、それぞれの風格人柄をよくあらわしている。まことに書は人をあらわすものである。どういう訳かこの時の写真には、渡辺重役や先年亡くなられた川口鉄三郎さんの姿が見えない。

その頃、頭の毛をもじゃもじゃと不精にのばしていた私は、ある日のこと、明工場長からもっと整えるようにと注意をうけた。こと面倒と思った私は、当時の軍国調の影響もあって、きれいさっぱり丸坊主にしてしまった。いつか本誌にのっていた回顧座談会の記事のなかに、村上秋雄君が明さんから、頭がのびている、お金をあげるから床屋へ行けといわれて、仕方なく坊主になったという話を読んで、私は思わず膝をうったものである。私はその前の年の晩秋に結婚したのであるが、披露宴の席で初めて私の坊主頭をみた恩師の松沢武雄先生から、テーブル・スピーチで「久田君も漸く頭角をあらわした」と大変苦しいおほめの言葉を頂戴したのを憶えている。

この写真の中に、自分の坊主頭をみるにつけ、また右端から二人目の斉藤益太郎さんや故佐藤礼吉さんの国民服姿を見るにつけ、お正月ののどかな雰囲気のなかにも何か一脈大戦前夜のきびしい世相を想起するのである。

写真の前列左端で威風あたりを払っている紋服姿は勝田豊治君である。長島保雄君、氏家平三君、坂本松平君、故渡辺金吾老、御婦人では浅野課長婦人、横山澄子さん等の顔が見える。養成工諸君も大分揃っているようである。当時の社員は総勢三百数十人位だったろうか。

現在も引続き在勤中で当然顔の見える筈で見当らない人が幾入かある。それは名簿の巻末の出征及び入営者という欄をみて初めて合点がいった。そのなかに羽石平君（北満綏芬河村川部隊久信田隊気付鈴木隊）、吉原信吉

君（北支派遣軍タソヒ隊）、渡辺丈夫君（北支派遣軍タチヒ隊）などの名が記されてあって、大陸での泥沼戦争の激しさに思いあたるのである。

◇　◇　◇

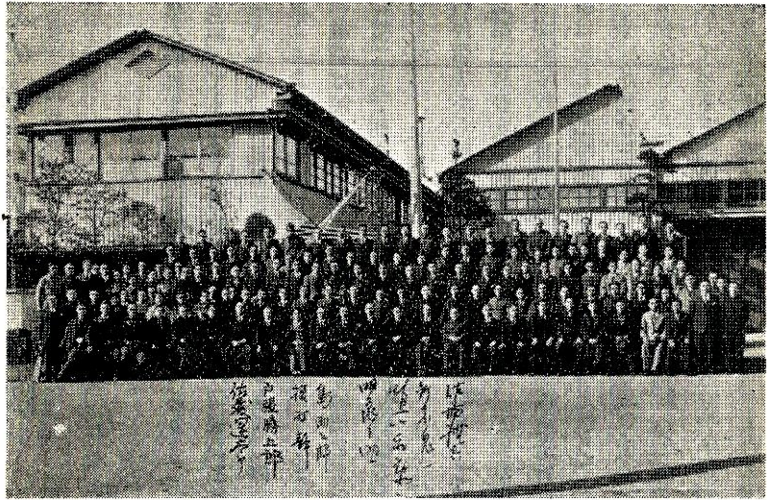
私の手許には、昭和十四、五、六、七年の正月にとった四年分の記念写真が残っている。会社にはおそらくもっと揃っていることかと思うが、これに名簿や解説をつけて逐次本誌に紹介してもらいたいものである。こんなことはしかし、われわれ卒業生？のなすべき仕事であって、現在第一線の、特に戦後入社した諸君にはあまり興味のないことかもしれない。そういえば、このような回想記も、あるいは私のひとりよがりにすぎないかをひそかにおそれるのである。

——つづく——

×　×　×　×　×　×　×

×　×　×　×　×　×　×　×

×　×　×　×　×　×　×



あの頃の〝アカシ〟界隈

中田与厚

関東大震災までは明石製作所は浅草にありました。浅草と云っても下谷との境で、市電の停留場の名前も下谷竹町でした。向側は浅草小島町から鳥越で、停留所の交叉点より上野寄りは竹町、西町と下谷になります。間の三味線堀は浅草か下谷か今はっきり思い出せない。それ程の境です。前を通る電車は、大塚から厩橋の折返し一本でした。

竹町停留場から厩橋方面へ約一丁の処にあって、当時の府立第一高等女学校の校庭と背中合せ、工場の横丁の突当りが女学校の裏門でした。所在地は浅草七軒町二番地。跡はたしか二等郵便局になっていたと思う。私は同番地の寮に足掛け三年居たので、事ある毎に書いたこの町名も今は茫々として模糊の彼方にある思いだが、こう書き記していると四十数年前の多情多根の小年像が瞼によみがえり若干の感概を催します。却説、上野公園と浅草公園と云えば殆ど同じ位のもので、両公園間を底辺した直角三角形の頂点が会社の所在地、直線距離各々一・五KM（これは確認のため今度観光用の地図で測ったものです）甚だよき処にありました。赤煉瓦三階建の当時堂々たる社屋でした。湯島切通し方面から厩橋まで松坂屋を除いては一番立派だった。仲御徒町の角に理化学器械メーカーの山越製作所があり、厩橋の交叉点の処に有名な糸問屋老舗が目立ったが、会社に競ぶれば物の数でないと内心誇らがおだった。町内には開盛座と云う芝居小屋があってチョイト名前が知られていました。

公園の宮戸座、本所の寿座などと竝んで芸達者な中堅の歌舞技劇の常打のようであった。後に沢正の自伝を読んで知ったのですが……

沢正が早稲田の学生の頃稽古帰りの剣道道具を肩によく立見したとあります。だから私は今の新国劇の芸風の中に、白面の書生沢田正二郎が其の時に、吸収した何物かゞ残っている様な気がします。然し私にはあまり興味がなく、もっぱら公園六区の方に魅力がありまして、

六区通りに専念しました。急いで歩けば十五分、開盛座前と清島町へ出て、菊屋橋を渡り、本願寺の境内を突

っ切り仁丹の広告の下え出れば、すでに六区の入口である。脇目もふらず御園座（現松竹座）の横を入ると分余にして日本館、左へ例の三館共通の金龍館、常盤座、キネマ倶楽部がある。オペラと新派劇、連続活劇を見て金十銭也。「女軍出征」や「天国と地獄」でやたらに足を揚げる踊り子の群れに満場騒然となり、訳の判らない押しくら饅頭が始る。ファンの度の過ぎたのをペラゴロと称した。そうしたグループが震源地であった様だ。最近亡くなった石井漠、藤原義江、　戸山英二郎、新国劇の秋月正夫が堀田金星、高田せい子は原せい子時々甲高い声（男声ソプラノ？）でボツカチオ等をラジオで唄っている田谷力三は、当時美男スタイルで局部的にはバレンチノ以上の人気があった。

これらの人達は今でも消息が知られている当時のスター達である。常盤座は水野好夫を座長として若手に大矢市郎がいた。「己が罪」、「生さぬ仲」等、当時の新派悲劇物が上演されていた。隣りのキネマ倶楽部は〝名金〟以来の連続活劇の常映館で、年がら年中「天国と地獄」の楽隊で始り一回の終りで客を送り出していた。

西部劇ではエスハートの二丁拳銃。馬を上手に使うトムミックス、いつもうるんだ様な目をしているフートキグスン、小気味のよいおぢさんのハリーケリ。最も好きな俳優は投縄のうまい、ウイルロージャース。浮世の哀歓を知りつくした様な慈愛のある顔、全くいゝおぢさんであった。……　此の調子で十二階下の〝花やしき〟まで語ると大変な事になる。すでに予定枚数の倍になっている。界隈物語の埒外でもあるようだから、一応打切って軌道に戻らなければならぬが、此の項あたりは編集の都合で没になるかも知れないが機会があれば後を書かして頂く事にして筆を擱きます。

ある会話

山脇　享

場　所　ある盛場の地下のビアホール
時　間　暑かった日の遅い夕方
登場人物　A・B・共にある会社の営業部員

A　このごろ会社の中の空気が一ころにくらべて住みにくゝなったような感じがすることはないか？

B　うん。実は僕も沈滞した空気を感ずることがしばしばあってなんとなく住みにくい感じだね。そういう空気は営業部内で特に強いように思うんだが。

A　もちろん営業部とて例外じゃないさ。でも僕は他部内でもそんな感じを受けることもあるし、かりに営業部だけにある雰囲気だとしても、もっと会社全体の問題として考えなきゃいけないんじゃないかな。

B　それは僕もそう思うね。但しその場合問題に一番近いのは営業部そのものなんだから、やはり部の問題としても当然取り上げなきゃいかんとも言えるだろうな。

A　うん。でも僕は問題だとは思っても、ある程度なるようにしてなったという、なかばあきらめの気持が先に立ってしまうんだ。

B　君がそんな事を言っては困るよ。部内ではそんな雰囲気が支配的でも、現状を改善して常に前進する会社にそだてるのは僕達なんだ位の気概を持たなきゃいかんというのはむしろ君の持論じゃないか。

A　そうだったな、ではもう少し建設的に今のような沈滞した雰囲気の源がどこにあるのか、先ずそれを考えようか。

B　それは営業部について言えば特に最近のように不景気で受註実績が上らない事も影響しているかもしれんがもっと本質的なものがその裏にある感じだな。

A　同感だ。はっきり言えば、課長、部長といった直接の指導者の考え方が我々と多少違うということだ。

B　うん。それが君の言う、成るようにしてなったという感じにつながるのか。たしかにその点ではもしかしたら、課長、部長クラスの人達は現状でもあまり沈滞していると思っていないかもしれないし、感じてはいても具体的な改善策を持っていないのかもしれない。でも僕は一概に指導者の考え方ばかりに責任ありとは言えないと思うね。そりゃ犬が病気になったからといって飼主側だけを責めるようなもんじゃないかい。我々自身がもっとやらねばならない事があるんじゃなかろうか。

A　飼い方が悪いんで病気になる例だってあるさ、僕が言いたいのは犬が病気になる予防をするのは飼主の責任だって事だよ。それに犬に愛情を持っていれば、病気になりかゝればすぐわかりそうなもんじゃないか。第一僕等は会社に飼われた犬じゃないよ。

B　まあそう腹を立てずに聞いてくれよ。つまり結果だけみてすぐそれを指導者の批判に結びつけるのは良くないと言ってるんだ。そういう事は職制を通じてフィードバックされるべきで、それでなきゃ組織の存在価値が半減するよ。その点では、もっと指導者を信頼しなきゃいけないと思うね。むしろ今の課長、部長に望みたい事は、第一線で働いている兵隊達が日頃どんな事を考えて働いているか知るように努力してほしい事だね。つまり犬の立場で言えば飼主にもっと犬の気持を理解してほしいというわけだ。会社がうまく運営されていく為にはやはりヒューマン・リレーションも大事だし、人間関係の出発点は相互の理解なんだから、いくら管理職にあるからといって独走しては皆はついていかないよ。

A　そういう人達に言わせると下からつき上げないのがいかんという事になってしまうんじゃないかな。

B　とんでもない。それでは大げさに言えば自分の責任を人に押しつけて知らん顔をしているようなもんじゃないか。管理職者は直接自分のミスでなくとも部下のミスなら責任をとらねばいけない事だってある筈じゃないか。

A　確にそうなんだが得てして自分に確たる信念がないと自衛本能が働いて保身的な事しか考えなくなるんじゃないかな。世の中にはそういう人が多いからね。

B　人間の弱い一面だね。とにかく人の上に立つ人とい

うのはやはり特殊な技能が要求されるんだから、会社としても管理職に対する教育をもっと徹底的にやる必要があるね。

A　我々とて同様さ。むしろ今すぐ教育される必要があるのは僕等かも知れないぜ。

B　それは痛烈だな。いや話をもどしてとにかく相互の理解ということについては僕はある程度までは結果よりむしろ理解への過程、努力の方が大切だと思っているがね。

A　僕もそう思うね。

B　それでは相互理解を前提とするとしてもやはり我々兵隊が考えねばならない現状改善策といったものもあるんじゃなかろうか。

A　それは当然あると思うよ。策そのものゝ話じゃないが、常に前進といった張切ったムードを盛り上げるには皆の足なみが揃わない事がずいぶんブレーキになっているんじゃないかな。つまり現状に大した不満もなく、問題意識も持っていず、あたりさわりなく世渡りをしようという、いわゆる悪い意味でのサラリーマン根生を持っている人がいるんじゃないか。

B　卒直な話、営業でいつか兵隊共主体で開いたなんでも話し合おうという会合ではそんな感じがしたね。そのときはがっかりしたが、でも大多数が現状に満足してるんならそんな無理をして問題意識を持たせる必要はないと思ったよ。

A　それは少々違うと思うね。人間現状改善の意慾を持たなくなったらすぐおいてきぼりをくっちゃうさ。ぼくはやはり考える必要があると思うね。

B　確にそうかもしれないが、でも課長以上を除いた営業部の人間は三割が女性でしかもみんな若いからそういう人達まで含めて画一的に我社の将来を考えて共通の夢を持とうと働きかけるのは無理なような気もするね。

A　無理か無理でないかしらんが僕が言うのは先憂後楽の精神、つまり世に先んじて憂い、世に後れて楽しむ精神をもっと皆が持てばずっと活気のある、建設的な営業部になるだろうしそうなってこそ我社をリードしていく営業部になれるんだって事だ。だから反応があろうがなかろうが、短い目でみないで、もっとじっくり働きかける必要があると思うよ。

A　女性の話が出て思い出したが、部内の主として女性方の仕事に対する考え方に腹が立つ事が多いね。

B　一部同感、一部無理もない。一部はむしろ良くやっていると感心する事もあって一概に言えないが、それは男性と女性の物の考え方の相違で割切ってしまうべきだと思うね。僕は元来女性不信だけど逆に言えば女性はあらゆる面で男性と違うんだからもっといたわってやるべきだという信条を持っているよ。

A　個人差はもちろんあるし僕のは一般論だけど、そういういたわりがかえってマイナスになるんじゃないかな。僕は一旦社会に出た以上社会人として持つべき当然の自覚、義務観念がないような感じを受けるんだ。具体的に言えば、与えられた仕事に対する責任感も少ないと思うし自分の仕事に対する探求心も少ない。例えば僕もセールスマンのはしくれだが、はしくれ並の心構えは持っているつもりだし研究心も持っているつもりだ。売り方のテクニックに関する注意程度なら甘んじて受けるが、本質的なことに対しては他人の雑言は封ずる位の気構えは持っている。……つまり環境が違っているなかで良いものを安く提供すれば誰が売ったってよく売れるだろう。自分はそんなだれだって出来る仕事をやっているんじゃないという自負があるんだ。話がとんでしまったが、要はそのような自分の仕事、会社の仕事に対する緊迫感を女性は持っていないと思うんだ。

B　それはごもっともだけどそんな事なら女性だけを槍玉にあげるにはあたらない。同じ部内でだれにでも出来る事しかやらん男だっていると思うね。

A　代金回収だって客先の無理を通しつゝこちらの希望通り代金をもらってこそ、高いものゝ良さを理解させて競争相手に勝ってこそ始めて仕事をしてると言えるようなもんじゃないか。輸出入の仕事だって通産省あたりの役人の言う通りやるならだれだって出来るだろうし、通り一ぺんの努力ならだれだってしてるのさ、つまり相手が努力しているんならそれ以上の努力を以て対抗しなきゃ今の世の中ではとり残される一方だという事さ。もっともその他の条件でそれにかわるものがあれば別だがね。

B　ふん、たしかにそうだ。おやおや、もうこんな時間かい、そろそろ帰らないと又信用を落すよ。

A　そうかい、せっかくこれから核心にふれようというところなのに。これだから女房持ちはつき合いにくいよ。

× × × × × ×

× × × × × × ×

相模工場について

〝上棟式〟

「あかし」編集部

相模工場上棟式が行なわれた様子は皆様すでに食堂階段の展示を御覧になりました事と思います。

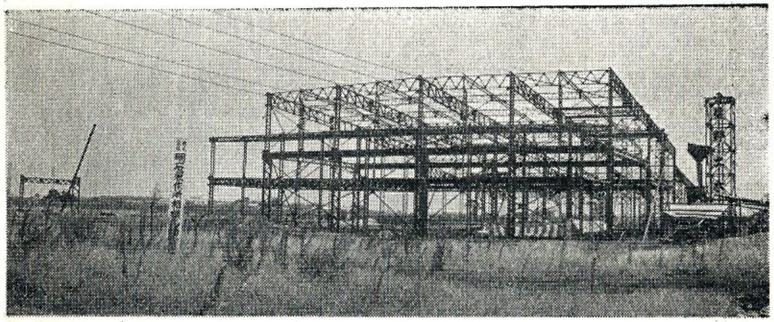
「あかし」二十一号で工事は石本建設会社の手に移り、五月上旬にクイ打ちをして九月末日頃に第一次工事を完了する構想である事を、お知らせ致しました。

ほゞ予定通り進行しましたが工事当初に雨が降り出した事などで、約一ケ月ほど遅れが生じましたがその後に石本建設と星野土木及び下請会社の協力により、その予定を取戻して今日（八月十八日）晴れの上棟式が執り行われました。

星野土木の林建築部長が工事に就て語られた事は工場設計と土地との関係で、北から南に向って地面に少しの傾斜があったために排水を考えると少なからず土盛りなどを行ったので時間と労力が予定以上に必要となった事と、工事当初に雨期だったので多少工事が遅れましたが十月上旬には完成すると語られた。

工場の建物の様子をみますと、外側のパネル一つをみても耐熱耐寒性を兼ねた非常に贅沢な設計となっていてエアーコンディションも十分に快適な雰囲気の中で仕事が出来る事と思われます。

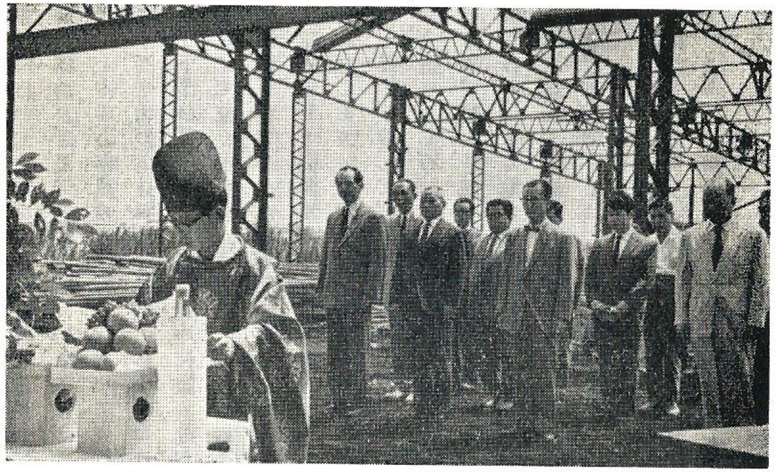
上棟式参加者は明石社長以下取締役、部長、次長、明友会長以下三名も招待されて参加し、石本建築、星野土木及び下請会社と座間町長、助役、課長、農業委員長等の来賓を迎えて三十数名が午前十一時二十分一同整列して式が開始され、神官の礼拝、各種祓い、散米、神祇降臨、祝詞奏上等式も進んで明石社長の鋲打ちの儀をもって式もクライマックスに達しました。続いて各代表者の玉串奉典も次々に終りまして、明石社長の挨拶があり、「明石製作所相模工場には非常に大きな希望と期待を持っており、最高の理想的建設でなければならないと考える。工場内部の構造設備についても念には念を入れて常識では考えられないぐらい最上のものとして設計されて



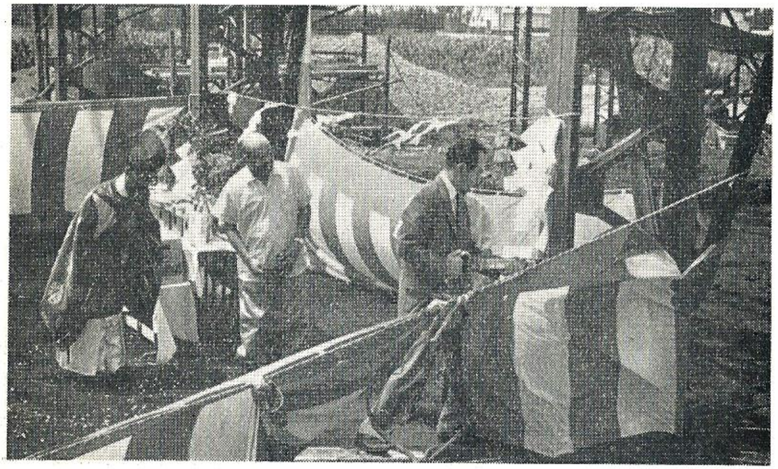
敷地北側正面附近より見た所です。左方の門形の鉄骨は独立した配電室となります。主機械工場内に大形十トンのクレーンも敷設される予定。
後方に望見される建物は〝すでに建築も完り生産に入った新工場群で四方に渡って遠く近く見えて〝相模工業地帯の片鱗をのぞかせています。

います。今日の上棟式も普通の意味の上棟式ではない、立派な工場造りを見守って戴きたい」と挨拶があり、続いて星野土木の近藤重役の挨拶「六月早々に仕事を始めましたが当初雨の御見舞いを受けて多少遅れましたが、組員以下下請会社一丸となって仕事に励み今日の上棟式に参加させて戴く事が出来ました。又仕事の面でも作業指導は懇切丁寧であった事を感謝致して、十月早々には立派な建物として引渡す事が出来る様、又十分期待にそえる様努力しますから御指導と督励を下されん事を望みます」と言葉を結んだ。座間町長も進んで座を立って明石製作を讃え、明石社長が工場建設にこの地を選んだ御英断を誉め、建設に従事する星野土木会社もこの土地の会社でもあり、この地の南側に理研ゴムの建築も手懸けてきました会社で私達とも親交も厚い事でもありますから、どうぞ御信頼下されん事を、又これからも事故もなく、無事に仕事を完了されて御引渡しの出来ます様に」と御挨拶されました。これで一応上棟式を無事終了しましたので閉会して参加者もそれぞれ帰路につきました。

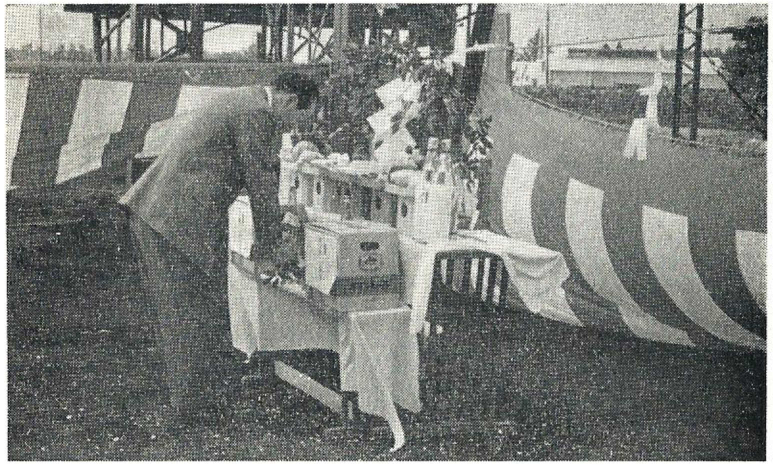
上棟式の始めの神主の祝詞



社長以下会社幹部、代表者、及び工事関係
者三十数名列席す。



上棟式当日の一番主要な明石社長の鋲打の儀。
大兵なる明石社長の手中に、エアーハンマーの響きも
勇しく鉄骨に記念鋲が打込まれた瞬間。



続いて玉串奉典に入り明石社長の初奉典

明友会会長の玉串奉典

上棟式終了後、明石社長の挨拶

季節の栞（すゝき）

小川翼

辞書をひくと、ススキは芒とも薄とも、又尾花とも書く。秋の七草の一つで、日本の秋を一層深く感じさせるのもこのススキである。日本全土の山野に分布する為に昔から日本の風俗や小説や詩歌の中に多くススキの名が出てくるのも、いかにこの雑草に類するススキが日本人にとけこんでいるかがわかる。

私も子供の頃、母からススキを取ってくる様に言われたものであるが、今の住みにくい東京では、ススキの穂を見るにも、郊外に出かけていかねば見られない今日このごろである。せめて十五夜の時期になると花屋の店頭に現われるのを楽しみにしている次第である。

詩

夏の終りに

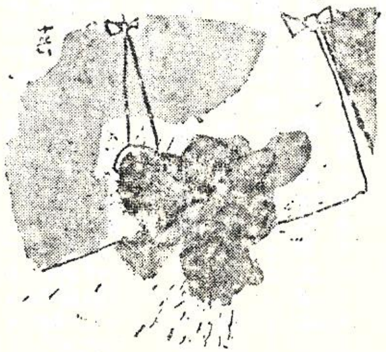
やまだきみこ

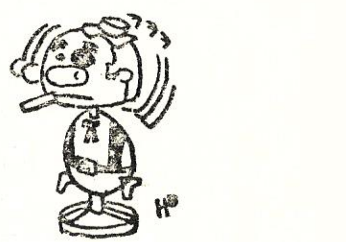
店先の・氷ののれんが
色あせてゆれていた
小麦色の娘は　もう
サングラスを気にしなくなつた
肌にさら〱と　風が通りすぎた
白いパラソルが

物憂げに　あるいていた
うつむいて歩いていた

螢光灯が冴えだして
群がる虫も死んでしまつた
熱いコーヒーを含みながら
ページをめくる音が　妙に大きかつた

台所の片隅に　コオロギが鳴つた





因果な稼業と来たもんだ

中島　公

どんなわけで、この会社で、しかもこんなわけの判らんものを売り歩かなければならない破目に立ちいたったのか、あたし自身でもサッパリ判らない。因果という事でしょうかね。

しかも右も左も判らない大阪へ行けという御託宣であった。大阪は酒が旨いよという甘言にソソノカされてしまったのが運のつき。何とも心細い気持で大阪駅に立ちすくんだ。

「あのー、堂ビルってのはどっちでしょう」

「アッチだす」スタスタ……

「サヨカ、おおきに」

大阪の第一印象は極めて良くなかった。もっともアッチの方へ行く事しばし、やっと堂ビルと大盛りの朝定食にありつきはしたが。

大阪の夏はヤリキレナイ。全くどうしてあゝもむし暑いのか、一度気象庁へ文句をいうつもりです。特に地下鉄はひどいね。トルコ風呂が頭をかいて逃げ出したそうである。

「あゝ、明石さんだっか、電子顕微鏡について一寸調べたいんだが、カタログもって来てくれんやろか」

「ハイハイすぐ伺いまっさ」

何事もショーバイである。暑さ寒さも何のその、重いカタログをひっかゝえて汗をふきふきあちらこちらウロつくという寸法に相成る。

このカタログという代物、なけりゃ困るし、あれば重いしで全く厄介である。或時……所きらわず、の原理で某所に赴き、出すべきものを出して、サテと思ったがペーパーがない。大分ソワソワしたが見当らず、ママヨ

と角の折れたカタログを失敬して、用いたが、これだけはイタダケませんでした。まだ砂でもマブしておいた方がサッパリする。つまりカタログは本来の使命しか役に立たん代物である事が証明された次第。

営業部というところは人と会う事が大きな仕事の一つとなってくる。しかめ面をして「……のナントカです」てな事を言って仁義を切る。つまりメイシと称する紙きれをウヤウヤしく交換する。

ところが時として自分の名刺の中に他の名刺が入り込んでいる事がある。相手がその瞬間妙な顔をしたらば、多分それは「観光旅館、ナントカ家」とか「すぐにお電話下さいませ。純情なナントカ（地名）乙女がお待ちしています」……クラブてな名刺を渡してしまったにちがいないのである。

名刺を交換して話す時はよいけれども、止むを得ず何のタレソレだか判らずに話し合う事も時々ある。

「ナントカ教授の所のダレソレ助教授はまだ、いらっしゃってはいませんでしょうか」

「まだの様ですが……」

「ハアドーモありがとう、教授のヤツでも良いんだがなあ（ヒトリ言）

「わしがナントカ教授だがね」

「アッ、ソノドーモ……」

と支離滅裂になる事ウケアイである。名刺は常に携行しなくてはならない。

我々は日本国中ウロ〳〵しなければならない運命にある。お客さんは東京だけてなわけには行かないからだ。従って夏のウダル様な時に九州くんだりまで行かねばならんし、冬のフルエ上る様な時に北海道へ行く必要が生じてくる。何ともはや仕方ないですね。

さりながら、時としてはその地方特有のウマイものをココロミる事も出来る。我々のささやかな役得である。あたしは食通とかいう高尚なものではないが、生来いたってクイシンボであり、あらゆる食べられるものを試みてみたいという下品な望みをもっている一人である。たしかに交通便利になって東京でも大阪でも、凡ゆる土地のものが喰える事は喰えるが、値段の方が我々と折合ってくれない。高々五〇〇円以下である事が必要条件である。従って地方での家庭のいわゆるオソーザイとしているものを対象とせざるを得ない。

先ずその土地の銭湯に行き、方言を二つ三つおぼえ込む。それからオカミサン連中に混じって、ヤオヤ、サカナヤの店先で奇声を発しては奇妙な魚、貝類を買い込んで旅館に持って帰る。いやがるのを無理に料理させてそれをサカナに地酒を一杯傾けるのは、心楽しい事ではある。

冬、北海道に行けば「ツブ」とかいうタニシの化物みたいな貝がある。これはかんをつけたドブロクをすすりながら、カジると天下の絶品であろう。

九州の初夏には鮎が多い。クマ川のほとりで鮎の洗いにクマショーチューを冷して試みれば心洗われる心持がする。

この様な、わずかの楽しみがあればこそ、わたしは九州くんだりまで国をはなれて何日もウロツク事ができるのである。さりながら常に用意万端ととのって出張する事ができるわけじゃない。

「今日すぐ熊本に行かなきゃなんないね！」

「誰が行く事になるだろ」

「アミダかジャンケン」

てな事で運の悪い時にはしかたなく、トボトボと、夜行列車の通路に寝ながら、行かなきゃならない破目になる事もある。

運よく特急寝台に乗る事が出来ても、トナリに外人の女性、しかもオバアチャンがいるとサア大変、片言の英語をアヤツツタが最後、はじめから終りまでとんでもない目にあう事必定である。

「アナタハ　ドコマデユクノカ？」

「アタシ　ナガサキエユク」

「オー、ナガサーキ、ワタシモナガサキエ観光ニユクアナタモカ？」

「ノー、商売ノタメ」

「ドンナ商売ナリヤ？」

「エレクトロン、マイクロスコープヲ売ル商売」

「ウオツト、エレクトロン、マイクロスコープ？」

「ウーン、エート」と絶句するという次第、その間彼女のすすめる、チョコレートやキャンデイをいやでもなめなければならない。そのうちに「窓を半分閉めてくれ」とか「エキベンはどこがうまいか？」「ミルクを買って来てくれ」てなご注文がでる始末。

狸寝入りか、本を読むふりをするか、食堂車へ難を免

れるか、とにかく苦心さんたんしなけりゃならない。

出張というものは全く楽じゃないのである。

我等、営業屋が一番心楽しくなる時、それは注文書を見た時であろう。まるでラブレターに返事をもらった時の様な有頂天さである。営業マンには、こんなロマンチストが多い。というよりこんな連中ばかりである。

車窓から騒音に混じってコオロギの声がきこえてくる。遠くの家の灯が暗闇の中をゆっくりと流れて行く。諫早をもうすぎた。間もなく「ナガサーキ」である。

（未完）

とに角考えてみて下さい

三輪修三

私はこれからいくつかの断片的な話をご紹介します。それらはおたがいに何のつながりもないものですが、読んでいたゞければそれぞれが適当に関連し、共通したものがあることが判っていたゞけると思います。そしてそれが判って貰えさえすれば私がこの文をものした意図は達せられたわけです。無駄話はやめにして……

一、

世に「めあき千人めくら千人」とか申します。これは世の中にはものわかりの悪い阿呆が大勢いるから注意せよ（あるいは安心せよ）という意味かも知れません。だからこそ取扱説明書などは馬鹿でもチョンでもよくわかるように書くのでしょうね。あるいは逆にこの言葉は、世の中には何でもよく知り抜いた人がたくさんいるからあまり利口ぶると（俺だけは正しい、自分だけは識っているなどと）恥をかくぞという警告かも知れません。

この異る二つの解釈は次のような立場の違いによって

生じます。すなわち「馬鹿（もしくは利口）が千人もいる」というのと「千人しかいない」との違い。さて皆さんはどちらが正しいと思召す？　またこのことわざをどう解釈されますか？

二、

仏教のあるお経の中にのっている話。昔あるところに目の二つある猿——あたりめえだと云わないで下さい。当り前と思われては話が出来ませんから——がいて、道に迷ったあげく見知らぬ遠い国にたどり着きました。するとその国の猿はみな一つ目なのです!!　この二つ目猿を見つけた一つ目のボス猿が「やあこいつはかたわ者だ。みんなでやっつけちまえ!」と叫びました。それで一つ目の小猿どもがてんでに「やいこのかたわ者め」とののしりながら二つ目をいじめたということです。話はこれでおしまい。

三、

これは最近実際に行われた調書から。将来日本の「標準語」——現在日本語には共通語はあっても標準語はまだ存在しないというのが専門筋の見解です。共通語のことを誤って標準語というのはいなかの小学校の先生ぐらいだそうです——を考えるとき、どういう基準によって「標準語」を判断するか（例えばイリクチとイリグチとどちらが望ましいかなど）を国立国語研究所が三百名の識者、専門家にアンケートしたところ、標準語として望ましい形は当人がいま使っている言葉になんと九十パーセント近くも一致するという結果が出たそうです。皆さんはこれから何をお感じになりますか？

四、

云うもお恥ずかしいことながらこれまで私は「重複」という言葉をヂューフクと発音して何ら怪やしむところがありませんでした。ところが先日A部長と雑談中、部長がチョーフクと発音されたのが妙に気になりました。帰って早速（これをソーソクと云ったら常識を疑われますね。それと同じことなのです）調べたらみごと私が間違い、チョーフクが正しかったのです。間違いとは判っても使いなれたものを改めるのにいくらか抵抗を感じましたが、それ以後は改めることにしました。そののち、事あるごとに気をつけていますと我が社においてもまさにめあき千人めくら五百人です。

言葉なんてどうせ流動的なものだからどうでもいいじゃないかなどと云ってはいけません。めあき千人の中ではあなた自身の評価にも関係しますから。

以上が本論で以下はツケ足シですが、チョーフクのついでにもう少し当社の横綱格を。それは「進捗」と「相殺」。これらは当社ではお恥かしながらめあき百人めくら千人です。ちゃんとした席上で臆面もなくシンショー、ソーサツなどと云われては二つ目猿がオレハカタワジャナイカイナと錯覚を起しそうになります。明石言葉としてだけなら愛嬌もありますが、習い性となるのがおそろしい。何しろ広い世界にはめあきが千人もいるのですからね。

※　進捗・相殺の正しい読み方は文末に。

以上の話から次のことがらがひき出せましょう。

一、世の中にはめあきが千人もいるぞ。桑原桑原。
二、異常か支配的な世界では正常が反って異常とされる。
三、自分が見慣れたもの、使いなれたものは抵抗を感じないからつい正しいと思い込みがちだ。
四、それでは正しいものとは何か。それは当り前と思って受け流していることに対する反省から得られる。
五、自分の誤り（それがことに慣れたものであればあるほど）を改めるのは苦痛なものだ。でも放っておくことはできない。

あることを正しいと判断するには、世の習いと通念とは別にはっきりとした理由もしくは根拠が必要です。しかもこの根拠はさらに、その底に約束ないし仮定を持っています。数学の公式を例にとればこの関係はおのずと明らかでしょう。この点人間の創造力、推理力、組織力えい面倒くさいからひとまとめにして云えば人間の理性の働きは全く敬服すべきものです。

ところが日常の現実の問題となりますと、人それぞれが善意と判断力とを持ちながら、「正しさ」の判定がぶつかることが多いのも事実です。それも、仕事に関した事がらのように没主観的に（客観的とは少し違います）没個性的に処理できるものは判断の根拠まで簡単にさかのぼって反省できるから問題はむしろ簡単ですが、恋愛、夫婦、親子の関係などのように主観や個性と切り離すことの出来ないような問題——恋人や親や妻子が亡くなったとき、それを他の人で代用できますか？　また自分が死ぬとき他の人に代ってもらうことができますか？　こ

ういう他でおきかえられない個性の尊厳の問題をいうのです――については、人はいったいどういう基盤に立って「正しさ」「真実さ」を意義づけ、主張し承認してゆくのでしょうか。

情愛とか本能とかいうつかみどころのない、いゝ加減な逃げ口上でごまかすのは止しましょう。それは二十世紀の神話的殺し文句にしかすぎず、この言葉を使えば何となく全部判ったような気がしてもその実何にも判ったことにはならないのですから。人間が「正しく」「誠実に」生きてゆくことの意義や目標、ひいてはそれらが正当であると保証するための根拠はそれではいったいなんでしょうか。

ようやくどえらい問題をひき出したばかりのところで私はペンをおかねばなりません。この問題は一人一人が真剣に考えなければ誰も助けてくれません。それは、生活環境も経歴も、また生活態度も異なるAの人の解答をそのまゝ――Bの人の解答とすることはできないことなのですから……。では最後にひと言、聖書から引用。いろんな解釈が可能ですが、とに角考えてみて下さい。

人が全世界をもうけても、自分自身を失いまた損したら、なんの得になろうか。

ルカによる福音書、九の二五

（註）進捗→シンチョク
相殺→ソーサイ

猫は哀（かな）し

河野健雄

「猫は三年飼って三日の恩を知る」とか「猫は人より家につく（馴つく）」という、これからみてもわかるように、至って猫に対する人間の評価は、犬や他の家畜に対するそれよりもずっと辛辣で冷淡なものがある。

それだけに人と猫には何か深い因縁でもあるのか、それとも人間が猫のすべてをよくよく理解した上でのことか、猫の性質や状態を人にそのまゝ当てはめたり、比喩することによって私たちは怒られてみたり、中傷されたり、へり下ったり、軽蔑したり、されたりの悲哀につまされることが、まことに多いことに気がつくからである。

この二つのことわざの中に濃縮されているものがあるとすれば、水のさし加減でどんな味になるか…水遊びしながらインスタント・ジュースを振舞うようで、いささかおとな気ないが、過ぎゆく晩夏の夜を、猫に憑かれた文芸三昧で戯れてみた。

×××　×××　×××

大都会の日に日に展開される変貌とか、人の世の人情の酷薄さを指していうのならまだしも、今いった事と次にいうことがまるで違うことを主張する人や、気持の層にムラがあり、とかくお天気の崩れやすい性質の人に出会った時は「猫の眼の如く変る」と、すかさずいってのける。それは白々しい表情で二重性格を精いっぱい装っている冷たい横顔に向かって「あの人は猫を被っている」といわれる批難にそのまゝ通じてくる。猫はその有難くもない性質をあげられて、いとも簡単に名刺の肩代りをする。

仕事が少したてこみ身動きのできない状態になると「本当に猫の手も借りたいぐらいだ」という。お百姓は農繁期になると極めつけ文句のように「猫の手も借りたい時だ」と連発する。人が目の色を変えてあたふたしてい

る時に、手を空いているのはズバリ猫だけだといいたいのだろうか、どうか……

それに近い言葉で、のんきでこせこせしない楽天家が寝たり起きたりのゴロゴロしている生活ぶりを見て、世間の人が羨望を交じえて冷笑を投げかける時に「あの人は、まさに猫楽」ときまっていう。猫はこれからしてもよほどのなまけものとみえる。

かんでふくめるように言い聞かせても、聞いているのか、わかっていないのか馬耳東風、水がかゝっても唯、悠然と眼をしばだたいている蛙の風貌を思わせる相手のことを「隣の猫を一昨日叩いたような顔をしている」という。かくなればノイローゼの気使いはもとより、気苦労がなくてたまには演じてみても悪くはないようだが、あの人はスカスカした林檎の歯応えのタッチだと決めつけられてくると言われて決していい気はしなくなってくるものである。

たとえ不機嫌さがそうさせるのであれ「行ってマイリマス」「只今」とも何もいわないで戸をあけ閉めして出入りする時、また一日中遊び呆けて夕方ちかく、何となく気遅れがして、そっと裏口からしのび足で入ってくる子供、それを「盗ッ人と猫みたいだ」と人呼んで、怒られたり、プライドを傷つけられたりしたことは、けだし誰しもの記憶にあることであろう。

盗みの濡衣を着せられたり、嫌疑をかけられて、ひどい侮辱にカッカしてしまうとき「まるで人を泥棒猫呼ばわりするんだ」といって興奮の態に陥り、噴満やる方ない思いを味う時にも、きまって猫の名が出る。

ますます悪い代名詞にされてくる。それでは猫が可哀相だから、もう少しましなことに使われているものはないだろうかと、今度はおもう。

わが家では恐しいもの知らずの腕白坊主を他所へ連れてゆくとまるでおとなしくなって、ろくすっぽ口もきけない子供になってしまう。それを称して「借りてきた猫みたいにおとなしい」とよくいう。事実、ネズミを退治して貰おうと思って隣の猫を拝借してくる。さて自分の家の座敷へ上げてみると、さっぱり動こうともしない猫の変りように、あきれることがある。

自分では大したものだと思っている求めたばかりの土地や御自慢のお庭を、他人からうらやましそうに「結構ですなあー」といわれると「イヤイヤほんの猫の額ぐら

いでネ」と一応へり下っていう。猫の額はそんなに小さくせまっているのだろうか。「あの人は額が狭くてネ」というと、貧弱でどことなく風采の上らないことが裏にひそんでいて、中傷と噂の種子にしてしまうところをみると、やはりそうなのかもしれない。念のために外国では、猫の額にとって代るものにハンケチがある。猫の額とハンケチ、いずれも小っぽけなものをいう代名詞にすぎないようである。

甘えッ子を盲目的に撫ぜたり、なだめたりで叱ろうとしない子供の扱いぶりを見て「猫撫で声」で「猫可愛がり」という。とにかく撫ぜたり、さすりさえすれば気持よく居眠りする猫の習性を、そっくり頂戴している好個な例であろう。

まだまだあるのだから面白い。

うつむいて前向き加減で歩く人を「猫背」といい、柔い髪の毛の持主を「猫毛」という。これらは人体にそっくりなぞらえてみたものに外ならない。

果てはたべものにまで「猫めし」と呼ばれるものがあるようだ。釣舟で沖に出るときに持ち合わすものだと聞くが、いまだかって試食したことのない私にも、その…何となく、こう…ゴチャゴチャした感じでうまいものとは思えないイメージである。

熱くて湯気の立ちこめているものなど、まずまず食べることができない人を「猫舌」という。狭い裏長屋に通じる路地裏を「猫また小路」といい、植物に「猫柳」を始め、宝石のたぐいにも「猫目石」なるものがある。

実に数えきれないだけある。このように猫に例えられるものは、概してありがたくないものばかりで、このまゝでは猫は余りにも哀しい。そこで猫なくしては生れなかったであろう文学の中に見られる猫を挙げて、その面目を一新せざるを得なくなってくるのである。

そのトップ・ランキングは、夏目漱石の「わが輩は猫である」。ここには人間社会を鋭い眼で痛烈に批判し、揶揄する猫が登場する。この猫の出世振りは、一挙に今までの汚名を返上してしまう。

詩の世界でうたわれる猫に、萩原朔太郎の「青猫」に全てがある。

そのしなやかな体の描線から生れる機敏な動きと、神秘的な眼から放つ妖しい謎の光に特性を買われた猫は、ミステリー、スリラー小説の鍵をにぎり、脚光を浴びて

華々しい活躍をお目にかける。ポーの「黒猫(ブラックキャット)」に代表されて、仁木悦子の「猫は知っていた」にうけつがれている。

しかしその個性が邪魔してか特異なマスクを売りものにして、必ずといっていい位、悪役を与えられて出没するのがデイズニイ映画の猫である。ギャングを振り出しに、人さらい、かたりや、スリと一手に引きうけて演じる。ピノキオを誘惑し、シンデレラを助けようと奮尽するネズミを執拗につけ狙うのも猫であって、善良な猫にまだお目にかかったことがない。かくなるとデイズニイという人自体、猫がどうも好きではないらしいという勝手なせんさくまでもしてみたくなる。ところが、最新作の「一〇一匹のわんちゃん大行進」では、なんと盗まれた九九匹の小犬を、猫一匹の大奮闘で危うく虎口を逃がれ、助け出すというクライマックスさえある。これはまことに意外で最初にして最後のような気がする。

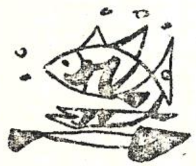
では最後に、もう一度名誉挽回をしなくてはならない。

谷崎潤一郎の「猫と庄造と二人の女」には、リリーという美貌の女猫が陰の主役で出てくる。ぐうたら亭主の愛情が猫に移ったことが発端で、女の嫉妬と虚栄がすさまじい闘争で展開する。この二人の女を相手どり猫は堂々と互角の研を競うのである。

かく書き出すと、まことに数限りないが、これで幾らか猫はプライドを保つことができたであろう。

惨々、人間の世界で悪者にされ、意地悪く扱われた猫は淋しいその境涯を終えて昇天してゆく……これで終りかと思ったら、さにあらず死んでからもまた「化猫だア」といって人は騒ぎ出す。鍋島藩の怪猫騒動の伝説を始めとして講談、落語のタネにされて巷を横行し、そのさ迷う怨霊は夏の夜話でスゴミさえきかせる。これではとても安らかに成仏するひまはない。

あゝ、猫はどこまでも哀しいものなのか……



オートメーション・ワイフ

漆谷章

オートメーションというものは、たいへんに便利なものだと私は思っている。この便利さを、日曜が来るたびに、私はあらためて感じているのである。

日曜の朝は、もちろん私は朝寝と決めている。会社の旅行で奥日光へ行ったとき、私の泊った棟には「三眠荘」という看板がかかげてあったが、私の朝の眠りっぷりを見て、仕上の石塚さんが、

「あんたのは六眠荘だね」

と、からかったことがある。結婚して八年もたった今さら、「春はあけぼの……」などとしゃれ込んで、古典的なお嬢さんの気を引こうという気はさらさら無い。一にも二にも、睡眠礼讃党なのである。

この朝の眠りが、雑音でさまされるくらい味の悪いものはない。今年の春、私の家のすぐ上の向ケ丘遊園で、防衛博覧会がだいぶ長い間開かれていた。日曜になるのを待ちかねたように、朝からポンポン花火が上って、おかげで慢性睡眠欠乏症にかかりそうになった。やはり寝起きは、いかにも爽やかでありたいものである。

私の日曜は、この寝起きのところからオートメーションが動き始めるのである。うとうとと布団のぬくみに浸っているところへ、突然顔にぱっとあたたかい蒸気を感じる。うっすらと眼を開くと、眼の前がまっ白になっていて、顔じゅうがぽかぽか蒸されている。ちょうど、床屋で顔をそっているうちに眠ってしまい、顔に蒸しタオルをかけられたときの、あれである。

タオルはぎゅっと私の顔をおさえ、それからごしごしと拭く。タオルが顔から離れると、その向うには、わが愛すべきオートメーション・ワイフがにこにこしている

というわけである。

彼女はちょっと私の耳を引張っておいて、二枚目のタオルを取り出すと、私の両手を万べんなく拭き込み、次には運んできた歯みがき道具が出て、私はベッドで半回転すれば口を清めることができる仕掛けである。それからミルクか紅茶かジュースがお盆に乗ってしずしずと現われる。ここで寝起きのオートメーション・ワンコースが終了する。これで寝起きは、間違いなく爽やかである。

ここで私は起き上って、ブランチをとりに階下へ下りる。これはもちろん自分の足を使うのである。わが家のオートメーションは、そこまで発達してはいない。これはオートメーション機械の出力不足のせいである。

食事が終ると、私はソファの上で腹ばいになる習慣がある。去年お腹の工合の悪かったときに、医者にみてもらったところ、十二指腸腸間膜動脈閉塞症なる長い病名を頂戴した。腸間膜動脈という血管の圧迫によって、十二指腸が閉塞している、という意味だそうで、これをなおすには、その動脈が十二指腸にメカニカルな圧力をかけないように、腹ばいに寝ていればよろしい、という御託宣であった。ちょっと切って、十二指腸を迂回させれば、たちまち御利益があるそうであるが、それはいささか剣呑なので御免こうむることにして、爾来私はせっせと腹ばい続けている。医者に腹ばい期間をたずねたら、

「そうですね。四、五年もすれば――」

という。面壁九年に比べればまだ半分である――と、一念発起することにした。まだとりかかってから一年余なので、アウシュヴィッツ・スタイルからは解放されないが、なかなか工合が良い。第一、坐禅より腹ばいの方がどれだけ楽であるかしれない。六眠荘の趣向にも、すこぶる適っている。

ここでまた、わがオートメーション機械が動き出すのである。最初、腰に指圧を感じ、それが背中に上り、肩、首、両腕から足にとぶ頃には、私はいい気持で眠ってしまっている。

まことにオートメーションは具合の良いものである。この調子で日曜が明け暮れるのは、じつに悪くない。断わっておくが、私は決して暴君ではない。何故なら私は命令をしたことがないからである。私は一度だって「お茶を持ってこい」だの「腰をもめ」だのと言ったことはない。これはあくまで、彼女のオートメーション性に

よるものと解釈している。

もっとも、彼女のオートメ性を促進するような要因が、こちらに無かったとは言い切れない。私の吊った棚は、運の悪いことに、かならず隧落するというジンクスがあるし、新婚旅行から帰った翌日、釘を打つつもりで左の親指を潰してしまった実績もある。以来、私が金槌や鋸を持つと、彼女は懸命に紅茶などをいれて、早くやめさせるべく努力したと疑われるふしがある。

いつか、会社のさる女性と、会社の帰りにいっしょになったとき、彼女は私の持っている袋に目をつけて言った。

「毎日荷物を持っていらっしゃるの？」

「これは弁当箱だよ」

と、私は答えた。彼女は感慨をこめて言った。

「あら、うらやましいわ。私もお弁当を作ってあげるような人がほしいわ」

彼女もまた、オートメ性乙女であるらしい。

わが家のオートメーション機も、しかし、ときにはミスがある。

この前の日曜の朝は、私が二階から下りて来て、居間の食卓の前に腰を下ろしてから、ワイフはパンを焼き始めた。トーストはあたたかくなければいけない。

わが家のトースターは、八年前私が結婚したときに、研究部の粟冠さん、栃木さん、製造部の梅田さんの三人が、共同してお祝いに贈って下さった由緒ある品物である。ありようは、「願わくはコンガリと焼きたまえ」という思い入れであったに違いない。当時、ＳＵＭ―５０と称した電子顕微鏡が始めてフイラデルフイアに出品され、社長と益田さんが渡米しておられて、われわれ四人が電顕の留守番をしている頃であった。

それから八年、トースターは実によく使わせて頂いた。私はパン食が非常に多い。日曜など、三度ともパンのことが少くない。二人で平均一日四枚は焼いているので、八年間に一万一千七百枚は御厄介になった勘定である。

ワイフはこのトーストでついミスを冒した。パンを入れておいて、

「これ、見ててね」

と、台所へ行ってしまったのである。

「心得た」

と、私はうなずいて、新聞をとり上げた。

私は最近、プロ野球欄に関心を示すようになった。これは研究部の小野口氏のせいである。彼の徹底した巨人ファンぶりは周知の通りで、朝など、

「おーい、ブラウン管がないぞ！」

などと、どなっているときは、巨人が負けたときである。去年巨人が優勝したときの、彼のうれしそうな顔といったらなかった。

「今年中に腹を立てたら、一回百円の罰金を払う」

と、宣言したほどである。その彼を、大いにエキサイトさせるのがおもしろくて、私は新聞のプロ野球欄を見るようになった。

この日は巨人―国鉄戦で、3対2で城之内が逃げ切ったときである。読み拾っていると、

「あら―変よ。見てて下さってる？」

と、台所から声がかかった。

拡げた新聞の向うを、目の隅でちょいと見ると、煙がもうもうと上っていた。私は答えた。

「うん、見てるよ。焦げてるよ」

「あら、あら、あら！」

彼女は台所からけたたましく飛んで来た。スイッチを切る、トースターを開く、片側まっ黒になったパンが余燼をあげながら顔を出て来た。

私は新聞から顔を上げて言った。

「昨日巨人は勝ったよ。だけど、大洋も広島に勝ったし、阪神も勝ったな」

彼女は一瞬、まじまじと私を見つめ、次にぷっ！と噴きだし、お腹を抱えて台所へ逃げて行った。

まったく、オートメーションは結構なものだと思う。しかし……彼女もそう思っているかどうか？……あるいは……オートメーションとは忙しいものだ、と思っているかもしれない。

―三七・九・六―

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

〃あなたは明友会に何を望みますか〃

〃あなたは機関誌「あかし」に何を望みますか〃

アンケートまとまる

明友会「あかし」編集委員会

去る九月十日及び十一日の両日にわたって、明友会及び機関誌「あかし」に対して、会と機関誌のより一層の発展を願う当編集委員会が明友会々員の皆様に求めたアンケートが、左記の様に集計され結果が判明したのでお知らせ致します。

まず、調査の範囲については、〃出来るだけ多くの会員から〃という主旨で、会員全員に配布することにしたが、調査日数が一両日という短時間であったためか、

配布数	三六四（会員総数三七七）
回収数	二九四
未回収	七〇

という範囲にとどまったが一応全会員の八〇％ラインに達しているのでほゞ全員の解答が得られたものとした。

さて、細目については回収数二九四を一〇〇％として無解答もパーセンテージに入れるのが普通であるが、項目によって無解答のものや、二つ以上（例えばA・E等）に〇を付けたもの等もあり、それに無解答数は全体の一～二％内外であったので、無解答は除外し、二つ以上に〇を付けたものもそのまゝ数に入れてパーセンテージを出してみた。

まず〃あなたは今の明友会に何を望みますか〃という題目で行なった明友会に対するアンケートは、

①今の明友会の存在の有無について

A あった方がよい	一六六	全体の五六・五％
B ない方がよい	四	一・三％
C 別の形のものがよい	一〇九	三七・一％
D どうでもよい	一五	五・一％
計	二九四	一〇〇％

②今の明友会の性格を知っていますか？

A 知っている	一〇八	三六・七％
B ある程度知っている	一五四	五二・四％
C 知らない	三二	一〇・九％

③ではその性格に対して

A 今のまゝでよい	八六	三〇・九％

B 別の形に改める　一五六　五六・二%
C わからない　三六　一二・九%

④今の明友会の活動（旅行、家族慰安会、図書、金融「あかし」の発行）について

A 今のままでよい　九六　三三・二%
B 活動不足である　一六二　五六・一%
C 活動し過ぎる　三　一・〇%
D わからない　二八　九・七%

という結果となった。

また〃あなたは機関誌「あかし」に何を望みますか〃に対するアンケートの解答では次の様な結果が出た。

①「あかし」の発行に対して

A 今のままでよい　一九一　六五・七%
B 発行が多い　八　二・七%
C 発行が少ない　六九　二三・七%
D 無い方がよい　七　二・四%
E どうでもよい　一六　五・五%

②今の「あかし」をどの程度読んでいますか

A 全部読む　一〇三　三五・四%
B 少し読む　三三　一一・三%
C 内容によって読む　一五三　五二・六%
D 全然読まない　二　〇・七%

③ではその「あかし」を読んでどう感じましたか

A おもしろい　三〇　一〇・四%
B 普　通　一七七　六一・五%
C つまらない　六五　二二・六%
D くだらない　一八　五・二%
E わからない　一　〇・三%

④これからの「あかし」の内容について

A 社内ニュースの充実　七四　二五・六%
B 文芸的なものを多く　五九　二〇・四%
C 評論的なものを多く　三〇　一〇・四%
D 技術的（含む会社の仕事、PR）なものを多く　四五　一五・六%
E 今の形体（全部の項目を含んだもの）　六〇　二〇・八%
F わからない　二一　七・二%

以上がアンケートの結果である。これでみると総体的な会員の考えとか意向の様なものが、皆様にもおわかりになったことであろう。

しかし今まで載けたような項目以外においても多々意見があると思われたので、それ等を含む意味で明友会、

「あかし」の両方の項目の末尾において、それぞれ会員の方々の意見を広く求めてみた結果

明友会に意見あり　四三
「あかし」に意見あり　二九
両方に意見あり　一一七
意見なし（白紙）　一〇五
計　二九四

すなわち明友会に対しては一六〇名の会員が、又機関誌「あかし」に対しては一四六名の会員の意見が寄せられたことになる。意見なし（白紙）というのが一〇五名で全体の約三六%に達しているのはちょっと淋しいが、これ等の方も前記のアンケートには解答を寄せられているところをみると、まるっきり意見がないということではないらしい？　寄せられた意見は明友会に対するものも機関誌「あかし」に対するものも大変広範囲にわたっていて、一つ一つこゝに記載することは困難であるので多くの共通性のある意見はまとめ、少数でも特に建設的な意見と思われるものは勿論採りあげ次に列記してみた。

はじめに明友会に対するものから掲載すると、特に多かったのが

○現在の明友会の性格があいまいだ

とする意見で、

○規約（昭和三十一年十二月制定の現在の明友会規約を指す）にあるところの親睦とか相互扶助とかいうものが、それぞれ慰安旅行、慰安会や見舞金の贈与という形でかたづけられているが、こういうことにとゞまっているのがはたして賢明なことであるか。

○その行事とか事業といわれるものがまったくの会社の天下り的内容を持つ仕事に終始している。

○親睦とか相互扶助に徹するならば、もっと自主性を持って会社とは別に、例えば運動会の様なものを企画するとかして、真の従業員（明友会々員）だけのものとすべきであって、この為の会費の値上げ、値下げ等も考えるべきである。

この他にも会の明確さを欠く理由として

○会の事業や、行事その他全体にわたり広報性に乏しく会員の動きを（意見を？）反映しない、何か役員だけの会のような気がする。

○それに役員自身が、役員としての自覚に欠けている等があげられるが、これとは又別に

○この性格のあいまいな明友会自体の性質を多少変える必要がある。

として次の様な多くの意見が集められた。
○厚生施設をどんどん作れるようなシステムにする。
○六年前の規約での活動は無意味、時流に即した規約の改正を望む。
○クラブ活動とか親睦を図ることを目的とし、厚生面労働面は別の団体を持つ。
○役員は専任として、より良い計画を遂次実行出来る様な制度に改めるべきで、公務多忙の従業員を会の仕事に従事させるのはどうか。
又、現在の明友会が親睦とか相互扶助の域から脱却できないのであれば当然
○労働組合を作る方向に持って行くべきとする意見が大変多かった。この他にも個々の意見として、アンケートにも現われた全明友会員の約一〇％にも達する〃明友会の性格を知らない〃とする会員に対して、
○この際明友会は会員に対して、その性格とか目的をハッキリさせる必要がある。
○特に新入社員に対して説明不足である。
その他
○もっと文化活動の発展を望む。
○現在の貸付金制度は、金額も少ないし利用者が一部の人達に限られているのではないか。
○会長の選出は公選にせよ。
等のほかに、現在の状態では（現規約内では）次の様な意見も多い。
○現在の活動程度で良いのではないか、現状では一応満足。
○会員自身がもっと考えるべきで何んでもかんでも役員の活動不足とするのは筋違いではないか。
○年中行事（例えば、家族慰安会、機達誌「あかし」の発行）で会社が金銭的援助のみしか行なわないものがあるが、これ等の事を明友会が手伝うという事も疑問、こういうことは会社が全面的にやるべきである。
以上が明友会に寄せられた意見である。次に機関誌「あかし」に対しては
○明友会の機関誌なのか、会社の機関誌なのか？という疑問に端を発し、
○明友会のものであるならば文芸部のような機関を作ってやるべきではないか。
○会社が機関誌として発行するならば明友会の役員が編集を担当するのは不合理である。

要するに明友会同様、性格をハッキリさせよ、というわけである。さて、その内容になると大多数の方々が、
○今の形体（総合的に会社の記事も、文芸的なものも技術的なものも、又従業員の意見の交換の場となる様な）のまゝもっと育てよ。
としている。この事は、どっちか一方に（例えば文芸物に主力をおく等）片寄ることが今の「あかし」においては、より一層不自然なものにするという考えに落ちつく。「あかし」に対するアンケート④項において、その考えが各項目にだいたい等しくわかれているのをみてもわかる。
最後にこの他、個々の意見として寄せられたものとしては、
○会社のニュースに力を入れよ
○従業員の意見の交換がスムーズにできる様な手段を考えよ。
○何んでもかんでも集った原稿全部を載せる事に反対（現在はその線が濃い。充実したものを望む）
○投稿者には何らかの形で謝礼するか、又は読者賞の様な形のものを作ってみては、
○社内だけでなく、一流の文筆家や実業家、政治家に簡単でよいから、一筆書いて戴くようなのはいかゞ
○写真やカットを多くする。
○ニュース性に富んだもの、家庭、職場等も考慮せよ。
等が掲げられた。
尻切れトンボの感はあるが以上で一通り皆様の御意見をまとめられたと考えるが、この他にもまだ多数の建設的な意見がある。これ等は又、日を追って発表する機会があればその時に掲載したいと考える。
明友会としても編集委員会としても本稿により、種々反省する事や反論もあると思うが、何分限られた頁でまとめたので御了承願って、〃アンケートの結果報告〃を終りたい。
最後に皆様の御協力を感謝致します。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

詩

無縁佛

—墓石の列—

安斉真司

谷間から丘陵の斜面にかけて
一面の墓石の列
すでに戒名も年代も消えかけた
苔だらけの石の列
日蓮宗も真宗も、天台も真言も
百姓も町人も
鍛冶屋も武士も
野盗も大名も
貧富の序列もなく並べられた墓石の列
弘化も天保も、安政も享和も
永録も元治もまぜこぜの
時代の順も関係なく
段々の
丘陵斜面の一面に
一面の石塔の列
　鼻かけの、腕なしの、首すらもない
　観音と地蔵との群像に

　蜘蛛の巣や苔がこびりつき
　彼等には、この暑い真夏の太陽もあたらない。

平野は眼下に展開し
蛇行する河の流れは濁つている
天かける灰色の雲足は速く
みるまに墓石の陽をさえぎると
雨が・・・・・・
「篠つくような」と形容するのか
そんな雨の、
雨が降り石のまわりの、
雑草を砂まじりの赤土に
たゝきつける。

　それでも苔はこびりつき
　蜘蛛の巣は水玉をはねあげる。
　宗旨も財産も格式も、
　時の流れさへちぐはぐな
　鼻かけの観音や、腕なしの地蔵の眼に
　きらきらと水玉が光つたとき
　太陽は勢一杯燃えていた。

―編集部企画―

家庭訪問

―あかし記者―

技術部設計課

橘　正行
　　和子　御夫妻宅

御住所

冷房のよく効いたビルから一歩外に出ると、八月の我慢出来ない暑さが肌に襲いかゝる。〃うーッ、暑いッ！〃こう毎日暑い日がつゞくと、口をついて出る台詞にも変化が無くなる。そんなある日、設計の橘さんのお宅にお伺い出来ることになったのは、前々から是非一度お伺いしたいとお願いもし、又こゝ数日の再度の訪問アタックに閉口されてか？　突然橘さんのお声がゝり、「季節物のトウモロコシでもボリボリかじりながら、世間話でもするつもりなら……」いらっしゃいと云う言葉に〃それッ〃とばかり出掛けることになった。

橘さんと御一緒に社を出たのが六時三分過ぎ。退社時のラッシュで混雑する東京駅から発車間ぎわの中央線快速電車に飛び込んだ。車中常に話題豊富の橘さんに、中野までの二十五分間もアッと云う間に過ぎて、中野駅北口発、西田町行の関東バスに再び飛び乗った。約二十分五日市街道際豊多摩高校前でバスを降りたときには、あたりは夕闇につゝまれて、武蔵野の面影を残す影絵のような深い木立の中に点在する家々の灯は、今都会の雑踏をはなれて来た者にとってなにか郷愁のようなものを感じさせる。お父様と我々を迎えに来て下さった正代ちゃんと手をつないで、バス停留所際のクヌギの並木に囲まれた小径をしばらく行くと、小高い丘を背に七、八軒の家並がある。

橘さんの「たゞいまッ！」と云う大きな声に反響するように「お帰りなさあーいッ！」と、元気な御子様達の声があたりの静けさと対称的に響いた。奥様にうながされて上ると、部屋の中央のテーブルの上に置かれた大きな器には茹でたトウモロコシが山と積まれてあった。

さてここで皆様に御家族の御紹介を簡単にしておこう。まず奥様のお名前は和子様、すでに御紹介済みである。長女の和枝さんは中学二年生で背の高い健康的な美しさはお母様に似て、スマートなレデイ、スポーツならさしづめテニスがお似合いになる、そんなタイプである。次女の富美子ちゃんは小学校五年、ちょっと丸顔でユーモアがあって御一家の社交家である。三女の正代ちゃんは小学校三年生、世界で一番ちいちゃな父上の恋人、てんな表現がぴったりの可愛らしいお嬢ちゃんだ。愛らしい三人の御姉妹と御両親の一家五人が構成する橘家は、常に明るく活発な毎日を送られているに違いないと、一目で感じられる。……

話をテーブルの上のトウモロコシに移そう。橘さんのところのトウモロコシの味は、イタリア人が異国でマカロニ料理に接したとき〃オ、ッマカロニスパゲッテイ!!〃（多分そんな風に叫ぶと思うのだが?）と感激するそのときの感じと同じではないだろうか、〃オオットウモロコシ!!〃（こうは云わなかったが）……思わず〃うまいッ〃と叫んでしまう。家の横手にある小さな畑で一シーズン平均三百本以上も採れると云う、御一家手作りのもぎたてのその味に引かれて、設計課の若い連中がよく集ると云う。世間話が一通り終ったところで、橘さん御自身のことに触れよう。御出身地は福島県、

奥様も同様福島県であるところから「当家は結婚したときから男女同県（権）です」ときた、これが冗談や洒落に聞えないところに橘家御円満の一端が伺われる。橘さんが東京に出られたのは二十才の時であると云う。御結婚は昭和二十三年一月十五日、お見合い結婚であったが唯今は恋愛中であるとのお言葉を戴き、訪問の時期が冬でなくこの暑い盛りにお伺いしたことをつくづく悔やんでもどうもならず、扇子とハンカチーフによる精一杯の抵抗にも汗は止まりませんでしたし、上京以来、今日までの変化に富んだ人生体験をユーモアまじりに特有の口調で語られたときなどは、おなかの皮が驚いて七転、八転する始末でした。現在のお宅は昭和三十年十月に完成されたもので、半分以上は橘さん自から手を加えたということですから、大工さんとしての腕はそんじょそこらの日曜大工は遠くおよばず、本職の大工が見習いに来たなんてことにもそのうちなりかねません。御趣味はまったくの多芸で、〃何んでもやって見たい〃と云う御本人の言葉通りですから一つ一つ書き出すと頁が幾らあっても足りないようです。まあ筆頭の絵画に関して御紹介すれば、勤労者美術展に於いて度々、入選の栄に輝いておりますことはすでに皆様にも御存知の方が多いことゝ思いますが、多忙な中に一刻の暇を見つけてはスケッチブックに鉛筆を走らせる姿をよくお見掛けします。又三人のお嬢様達が揃って絵が上手と云うのも特筆しなければなりますまい。お父様初めお嬢様達の作品が家の中狭しとばかりに壁や柱に多数載げられている様子は、展覧会場を想像させられます。近頃は、日本そばの研究にも手を出されたと伺って居りますので、『あかし』にもその蘊蓄が掲載され皆様がお読みになれる日がさほど遠くないかも知れません。スポーツの事にも多少触れますと、常々設計課ソフトボールチームのチーフコーチを自慢して居りますが、それはさておき水泳の腕前は若い者顔負けの元気さで、明石「海の家」の利用度は社内でもベストにランクされる程です。もっともその大半が家族お揃いでの家庭サービスに繋がってる点などその人柄の一端を知ることが出来ます。

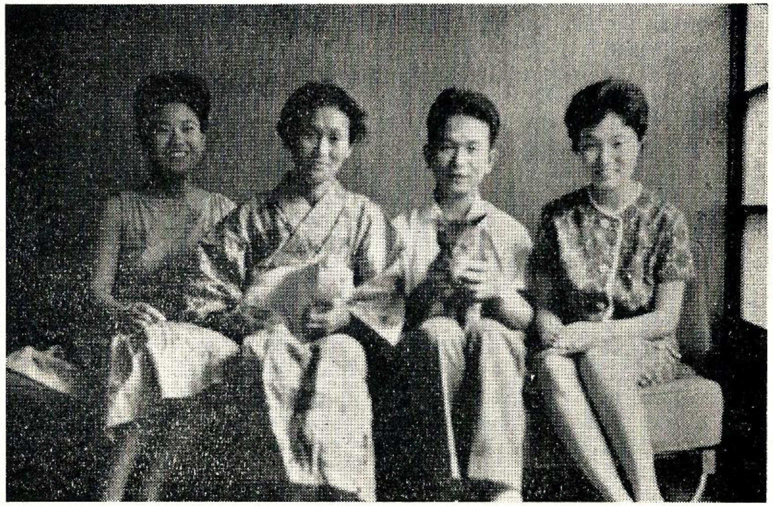
夏の夜の一刻、家の灯を求めて侵入する多数の夏の虫、木立の間を吹き抜ける涼風、テーブルには盛り沢山の御馳走、負けずに空けられた沢山のビールの空ビン……話がはずみ……刻がたって行く……、そして我等が

話せるオヤジ（形容が悪いかな？ゴメンナサイ）橘さんとその御家族、何の遠慮もいらない家族的な雰囲気に、家庭訪問という殻から抜け出しての世間話や悩み事相談、はては針小棒大なまるで突飛な話にまで発展、肝心の質問を出す間もなく辞去する時間になってしまった。

昨年度明友会の副会長という立場から本年度の我々明友会に種々の助言や又『あかし』の編集にも常に御協力して下さった事に対し、この稿を借りて御礼を申し上げると共に、この明るく温かい御家庭を訪問して奥様や小さなお嬢様達の心よりの歓待を受けたことに感謝し、御一家の末永き幸を念じつゝこの訪問記をおわる。

製造部計画課 新沼武氏宅

御住所



朝からの強い日射しを浴びて、海水浴客を乗せた満員のバスが長い列をつくって白い埃を巻き上げて行った。電車も同じように流行のハットにサングラス、ナップザックをぶら下げた若者、ムームー姿の娘さん、一目で開放的な感じを受ける人々を一ぱいにつめこんで後から後から続いて行った。

「海には定員がないからなあ」

そんな事をつぶやきながら、私は逆に北上して行った。

与野駅。私が始めて降り立った時どこか遠くの田舎町へ着いた様なのんびりした平和で静かな町だと感じたのである。新潟鉄工等の工場地帯を通ると、両側が長いコンクリートの塀である。夜は暗いだろう。人ッ子一人も通らない。多分みんな海へ行って与野には留守番しかいないのかも知れない。

〃御婚約を発表〃

郵便箱に「新沼」と書いてあるのを確かめてから玄関の前に立った。約束の時間の丁度一時である。

「ごめん下さい」

戸といい窓といい全部開け放された室内が玄関からまる見えである。間もなく

「やあ来たな」

と一人言を云いながら、当の新沼さんが出てこられた。

「やあ！暑いから中へ入ってくれよ、こっちの方が良いだろう」

と云われるまゝに、後へ続いてズカズカと巾の広い廊下を歩く、と次の瞬間新沼さんが急に後ろを振り向いた。

新沼さんの隣りには私達の来るのを待っていたのだろうか、うら若き乙女がにっこりとほゝえんで立っているではないか。

（おゝ美人だ、なんて素晴しいんだ、妹さんかな、これで今日来た甲斐があった）。そう内心で思った時、

「紹介します……こちらが同じ会社にいる……」

と私達記者二人を紹介してから、

「こちらはアキコさんです」

そして新沼さんは、自分にとって又この家にとって永久にないであろう歴史的な一言を発言したのでした。

「婚約しております」

あゝなんと言う貴重な一言だろう、この一言は千カラットのダイヤモンドよりも、地球上の金銀よりももっと

貴い言葉として私達の耳に、そしてアキコさんの胸に響いたに違いないでしょう。

明友会会員を代表して聞いた一言。訪問早々こんな特ダネを得られようとは、もうこれさえ聞けば良い、後は何も聞かなくたって良いようなものだ。思い切って飛び出して号外でもバラまいてやろうかと思った程うれしかった。

暑さと熱さ

扇風機がくたぴれたように首を振っている。無理もない、夏の暑さを吹き飛ばすのが精一杯で、二人の熱さにはとても歯が立たないのでしょう。

「こんどはほんとのオノロケだけどね」

このようにハッキリと前置きしてノロケられるのだから読者諸氏にも想像がつこう。

一先づ熱さを辛棒して今迄の思い出を語っていただきました。

今年の春、妹（妙子）さんの仲人を行っていただきました方が御見合の話を持ってこられ、写真の交換をしたとのことでした。新沼さんは写真を見た瞬間一遍で気に入ったのでした。

「お母さんすぐ返事をしてよ、いやなら自分で行って来る」

そう言ってお母さんを悩ませたそうです。……（妹、京子さん談

「それでは御伺い致しますが、アキコさんが始めて新沼さんの写真を見られた時どう思いましたか、」

「いやっ………」

はずかしそうに顔をかくしてしまいました。

アキコさんからの返事はすぐには来ませんでした。新沼さんはこの時の気持を、

「だめなんだろうか、ことわられるんだろうか、と、毎日毎日が気が気でなかったね。返事が来たときには正直のところほっとしたよ」

と述懐しておられました。

隣りではアキコさんが手を口元へ当てゝにっこり御笑いになり、顔を手で覆ったり、下を向いたり、顔を赤らめながらも彼の愛のオノロケがうれしくてしかたがないと云う感じです……（ゴメンナサイ）

御見合は六月八日、勿論話しはトントン拍子に進み、

現在恋愛中と云う訳でデートが最高の楽しみですよと語っておりました。たゞアキコさんの御住居が辻堂なので送って帰るのは十二時頃になるそうです。公認だから家では心配しないそうですけど、お母さんが起きて待っていると逆に新沼さんがおこるそうです。この辺は母親思いの息子さんと云ったところです。

「挙式はいつなんですか」

「十月十九日、多分大安だと思うけど。ふだん迷信なんてまるっきり信じないんだけどこんな時はやはり縁起をかつぐようになっちゃうね。それからね、嫁をもらうってこんなに面倒くさいものだと思わなかったね。もっと簡単に考えていたよ。向うに行って君が好きだから来てくれ、それで家に引っ張ってくるぐらいにしか考えてなかったよ」

現在家にいる妹（京子）さんも交際中と云うので話しは一段と熱くなる一方、とうとう雲の上にいるカミナリさんまで熱すぎてか、やけを起してか、我々に同情してか、いきなり空をまっくらにしたかと思うと大つぶの雨を降らせた。

熱さからのがれて

どうも記事の内容が熱い熱い二人の事にばかり気を取られてしまった様だ。

我々も熱さをまぎらす為に、新沼さん、アキコさん、妹の京子さん、それに記者二名と云うメンバーでポーカーを始める。ポーカーをやって気をまぎらわしているうちにその他の事を書いて見よう。

お父さんは建築関係の仕事をしているので、新沼さんが現在使用している室と巾の広い廊下もお父さんと新沼さんの共同作品と云うので、思わず室を見回してこんな器用な一面があったのかと驚きました。

お母さんが新沼さんの幼年時代の写真を持ってきて下さった。大きな木の下で妹（妙子）さんと一緒に写したものである。その頃の新沼さんはよく近所の子に泣かされて帰って来たそうですが、現在はおとなしそうな顔をしていながらなかなか鼻っ柱の強い所があり、この様に変化したのもやはり少年期から青年期へかけての生活状況や環境の変化による影響を物語っているようです。

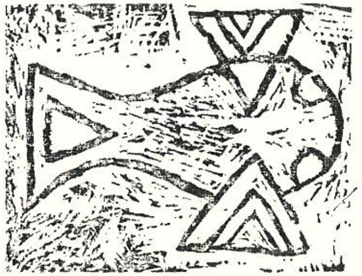
お母さんに「御子息から受けた一番うれしかった思い出は」と質問を投げかけて見ましたら新沼さんとお父さんが、別世帯で生活していた時、新沼さんがお土産として草履をプレゼントしてくれた事が一番うれしく、今でも忘れられないと語ってくれました。その草履を大事に押し入れの中にしまっておいたところが、一度も履かないのにネズミにかじられてだめになってしまったそうです。

いつの間にか雨も上り、近くで蝉が泣いている。ポーカーの勝利は我にあり、気分の高頂した所で大変長居をした事を詫びて今日の訪問を終る。

せっかくの日曜日を編集の為に、と云う事を大変気の毒がってくれる新沼さん御一家に別れを惜しみながら、この様な暖かい家庭に触れ一日を楽しく過すことがいかに大きな収獲であったかを省みて、この一年間我々編集部企画の家庭訪問記も、最後に明友会会長の暖かい、御家庭を訪問して皆様とお別れ致します。

× × × × ×

× × × × ×



横浜のうた

安斉真司

横浜が詩にうたわれるとき
それも大衆の口から
口にうたわれるとき
　港に灯がともり
　メリケン波止場は夜霧にぬれ
そして、いつまでも
　ギターが泣いている。

だが、彼等には罪はない
こんな一世紀も前の言葉を

後生大事にフトコロに入れて
それしかつかえない詩人どもの
作詩でない
ゲームにこそ罪がある。

この時間に
沖から響いてくるクレーンの音
徹夜で荷役が行われているのだ
　あのビルの三階の灯
　今も残業で書類の整理を
　彼等はやっているのだ

　きゝ給え
　あのエヤーハンマーの音
　突貫工事で埠頭は建設されているのだ。

音の雑記帳

長島保雄

皆さんこの題の頭の字を何んと読まれますか、大方の人はオトと読まれると思います。余程のヘソ曲りでない限りオンとは読まれないと思いますが、実は音楽としたかったのですが、私の感度の悪い耳と頭では題名に位い負けするので、「半分がいゝとこね」という、家族のお言葉に従う事にした次第で、従ってハーフの雑文です。この間好きな煙草代を節約して、（長島あたりがそんな事ないだろうと言われるかも知れませんが、家庭の事情がありまして当分耐乏の低姿勢です。）買ったカラヤン指揮の「新世界より」、この交響曲は私の好きな曲の一つで、前からほしかったのですが、今日の録音技術の素晴しさは、モノラルと比較しても映画の、スタンダードとワイド位の差があり、音域の広さがスピーカーボックスを忘れさせる位広く豊かです。

若い頃銀座三丁目の裏に「都」という喫茶店があって銀ブラの帰えりによく行ったが、或る夜素敵なピアノ曲を演奏しているので、若い時できまりが悪かったが、勇を振って帰えりにレジスターの女の子に聞いたところ、モーツアルトのピアノソナタK457でコロンビアの新譜と解った。さあそのレコードがほしくてたまらず、引付けられる様にレコード屋に入って、目的のレコードを手に入れた時にはうれしくてたまらず、所謂バラ色の気分で十二吋のレコード二枚入った袋を大事にかゝえて出て来たが、一枚三円五十銭の二枚計七円也で、サイフの中は空っぽ、服のポケットを全部さぐったが、バラ銭一枚も出て来ない。仕方なく大井町迄歩く事にした。

今考えると少々馬鹿らしいが、その時は大して苦にもならず、トコトコと満ちたりた気分で下宿に帰った。さて次の日工場に持って行き、今迄使っていた食堂がその頃も同じ食堂で、テレビのあった位置に電蓄が置いてあった。会社が終ってから留守番の中村さんから、「いいかげんに帰れよ」と、おい出される迄くり返しかけて楽しんでいました。電蓄のないのにレコードを買った悲しさで、今思うと喜劇です。

このピアノソナタはモーツアルトが新婚当時の幸福な時代に作曲されたものだそうで、後にはこの奥さんのむら気になやまされたそうですが、お互いに女性には気をつけましょう。あれっ！　脱線失礼しました。とにかくこの曲を聞くとさわやかな安らぎの気分にひたれるのは、そういう先入感があるからかも知れません。有名なベートーヴェンの運命の出だしの様な感じの、力強い第一主題と、知性を甘美でオブラートした様な感じの女性的な第二主題とのコントラストが素晴しい。第一楽章が特に気に入っています。演奏者は先頃物故されたワルター・ギーゼキングの壮年の頃の吹込みで、当時としては立派だったのですが、この秘蔵の名演奏もLP、ステレオが出るにおよんで、ダイヤモンドがガラスに変化したよりまだひどい。若い時から楽しんで今更こんな事は言えた義理ではないけれど、安物のトランスレスラジオの様に雑音が大きくて、ギーゼキングが渋い顔をしている。こんなレコードは心外だ。早く買い直せと言われている様でどうにもやりきれない。まあそのうち御隠居願って、同じ演奏者のLPが出たら買い換える予定です。誰です女房も雑音が多くなったから新しいのと取換えたいなぞと言っているのは、奥さんの方でも家の丹つくは、大分すり切れて来たから……と言っているのかも知れませんよ。余談失礼。

とにかく技術の進歩は有難いもので、十二吋二枚のレコードがLPだと片面が余る位なのですから、まったく良き時代です。この頃はピアノソナタ迄ステレオで出ています。一体ピアノ一台で立体感をどうして出すのか、少々不思議に思っています。私は熱情ソナタが好きなのでこれを買う時にはステレオ盤にして聞いて見ようと今から楽しみにしています。

ステレオレコードで特に私が魅力を感じたのは、E君より拝借したスイスロマンドの演奏する第九交響曲です。御承知の様にこの曲は一時間以上もかゝる上に、バリトンからソプラノ迄の歌手と一〇〇人以上の男女性コーラスが必要なので、実演は年に一回あるかないかの上に、レコードも全曲入っているのは数える程でしかないのが

一枚でしかもステレオで入っているのです。指揮はアンセルメでこの人はバレー曲を得意とするだけに少々派手ですが、ロンドンレコードの録音技術と相まって驚威的な立体感で、過ぎし日のローゼンストック指揮で新交響楽団の演奏を日比谷公会堂で開いた感激を生々しく記憶の底からよみがえらせてくれました。

ベートーヴェンの交響曲はその中にとけこむには余りにも強烈な感情表現で重苦しいのですが、この曲は合唱曲によって、今日に生きる喜びを感じさせます。終楽章迄は音で続けられた人間ドラマであり、苦難に打勝って悟心の境に達ずる迄があざやかに表現されています。野性の人だったといわれる作者が、音楽人として致命的な打撃を受けた後に作られたものとしては、まったく偉大な曲です。人間はやはり苦労してこそ精神が磨かれたものだと今更ながら感じました。ベートーヴェンも耳の故障がなければ、これ程精神的な感銘を与える作品が出来なかったかも知れません。

私は今のところ無信心で、神を肯定も否定もしませんが、もしあるとするならば心の中にこそ神は存在するものと思う。そしてこの様な表現感情の中には神が存在するか少なくともそれに近い心境ではないかと思います。昔から一芸に秀でたものはそこから悟りを開くといわれているが、もっともな事だと思われる。

感情表現といえば、ショパンのピアノソナタの中にある葬送行進曲はショパンの祖国ポーランドが、プロシヤの軍隊に滅されてしまった時、その悲しい運命に愛国的な情熱を託して、滅亡した祖国にささげられたものだそうですが、重い足どりで悲しい怒りを内に秘めて歩いて行く様なテンポの遅い低音で、暗い大きな穴に落ち込んで行く様なフォルテで見事に表現されていて、祖国愛の激しく深かった事が良く感じられます。今の一部の愛国者振っている人々と如何に質が違うか。こういう遺産があった事がポーランドが何回か亡ぼされては立上る精神的なよりどころの一片となっていると思います。

だいぶ長々と勝手な事ばかり書いて来ましたが、最後の付録に若い人達はジャズファンが圧倒的に多いですがこういうふうに勝手な解釈の出来るクラシックも又楽しいですよ。これが言いたかったんです……。

☆　☆　☆　☆　☆　☆

北海道旅行記

重松保弘

夜の上野駅を六月中旬とはいえ列車にてあふれる様な北海道行きの連中と共に出発した。私は朝五時過ぎ青森駅着頃やっと目をさましたが、東北地方の旅ははじめてなので途中列車の窓から景色を眺めていたら連絡船に乗船が遅れ一等船客とはいえ、ついに函館迄座る事が出来なかった。函館港へ入港前に展望せられるのは函館山である。この函館山は以前要塞として立入る事は出来なかったが現在は観光地として又NHKの放送局及び展望台も在存している。函館港に入ると大洋漁業の煙突が第一に見られ、北洋漁業の基地を感じせしめた。上陸してから目的の札幌市に行くのであるが、時間的に余裕があったので観光バスに乗る事にした。北海道の表玄関である函館市は明治維新の五稜郭の戦争幕末の悲劇の跡も見られるが、又情熱の詩人である啄木の墓地と彼の生ぶきが現在も見られ、我々青年の魂を躍動せしめた。だが対称的なものとしてはトラピスト修道院があり戒律の厳格なる事は言語に絶するといわれる。併しながら市中及び見学者にトラピスト飴としてバター飴を販売している事は、観光と宗教が混合した現在社会の悪い点を表現している事が感じられた。啄木の第二の故郷函館を後にして我々は一路札幌市へ向った。車中より見られる眺めは、アカシヤやポプラが走る様に過ぎて大陸の様な感じをいだかしめる。途中北海道の食道楽の一ツである長万部のカニを食べ舌ずつみを打ち乍ら車中を楽しんだ。北海道は温泉に恵まれる事本邦一で、夏季ともなれば女子大生等の修学旅行団と一緒になる事しばしばであった。札幌での宿泊は郊外の温泉地定山渓にする。温泉には比較的つきもののせゝらぎの流れを有する川をはさんだ小さい温泉で

はあるが閑静な所であった。こゝに五日間学会出席を重ね宿泊したのである。冬には近くにスキー場もあり良い所である。札幌の観光は〃少年よ大志を抱け〃と日本を去るに際しての言葉を残したクラーク博士の記念すべき時計台があり、北大のポプラ並木、農林試験場の羊の放牧もある。農林試験場の入口には有名なジンギスカン料理を食べさしているが羊肉は特有な臭味を有する故、人によっては好まぬかもしれない。次に羊の放牧場は羊ケ岡という名前を付けているが、チャンスに会わなければ壮観さを見る事は出来ないという事であった。残念乍ら私も見る事が出来なかったが、札幌市郊外の藻岩山の展望台で望遠鏡にてその羊の群を認める事が出来た。北大のクラーク館での学会も終り観光の旅に出る事になり夜行列車で札幌を後にした。翌朝釧路市に着き観光バスにて三日間の観光に向った。予定コースは阿寒を見て摩周湖に行き弟子屈温泉に泊り、二日目は屈斜路湖畔を通り美幌峠の壮観な景色を眺め乍ら温根湯温泉に至り、こゝに泊った。三日目は大雪国道を通り大雪山中を過ぎて層雲峡渓谷にて有名な多くの滝を眺め乍ら旭川に出て帰って来たのである。阿寒湖に行く途中に日本の鳥といわれるタン鳥ヅルの平野を通った。昔は大変成育されていたが最近は減少しているとの事で二三匹しか見る事が出来なかったが、カメラにとらえる事が出来た。阿寒は世界でも有名な藻類に属する毬藻で有名であって、以前に他に認める事が出来なかったが最近に他にも発見された事が新聞で報じられた事がある。その毬藻を見んものとバスより降り勇んで遊覧船に乗り込んだが繁殖場所に来て見ても湖水のにごりで見る事が出来ず、こゝまで来て残念であった。しかし船着場の水層の中にミズトナ毬藻が入れてあった。実に美しいもので何とも不思議な藻であろうと感嘆の声を一せいに上げたものである。阿寒湖にて昼食して一時間ばかりの休憩中に伝統の木ぼりの芸術を見るべく湖畔をめぐり歩いた。アイヌ人の女性は美人が多いといわれ非常に切れの深い目もと、高い鼻よりその容貌はインド系に類似している様に思われる。毬藻の町阿寒を後にして車は一路摩周湖に向った。摩周湖は景色が北海道一番だといわれ、その湖水が七色に見えると伝えられている。私が湖水の展望台に来た時すでに夕方で、壮観な感じはすれども湖水の色は見られず残念であった。しかし運転手の話によると一年の内、霧で湖水す

ら見えない事が多いとの事で我々は比較的よい方であるとの話であった。湖水の中程にアイヌの伝説を有する神社がある。昔、身分のあるアイヌの若者が貧しい一人の美女と恋におちいったが、月夜に湖畔で逢瀬を楽しんでいたが、ある日若者が重病になって会う事が出来なくなり非常な悲しみを得た。乙女は湖畔にて昔をしのび毎夜なげき悲しんだといわれている。若者はついに死んでしまった。一人残った乙女は湖水に身を投じたといわれる。アイヌの人達はこれら二人をあわれみ、湖水中の小島にまつったものが現在の神社であると云う事です。其の夜は弟子屈にて夢をむすぶ事とはなったが北海道といえば温泉の混浴が話題となるが残念乍ら弟子屈温泉はそうでなく期待はいっぺんに吹き飛んでしまった。弟子屈は大鵬の出身地であり、すでに温泉では盛んに宣伝していた。一夜を過ごした弟子屈を出て屈斜路湖畔の道路を通り砂湯温泉をへて硫黄山に行った。全山硫黄の黄色に包まれた草木も殆んどない火山系を示す硫黄の蒸気を噴出している。この山の附近には日本一の産出を有する硫黄鉱業所がある。硫黄山を出て川湯温泉にて休憩したが、早速温泉につかって見たが硫黄が多くて体が滑る様な感じであまりよい温泉とは思われなかった。しかし皮膚病等の人の治療にはよいであろう。美幌峠の壮観なる景色、そこから屈斜路湖を見下す自然美の表現は出来がたい。北海道には乙女の花黒百合が至る所にあり球根を買って帰ったが駄目であった。

最後の宿温根湯温泉ではついに待望の混浴であった。入口は違うのであるが中に入ると一緒の風呂である。ある人の奥さんが知らずに入り吃驚して端で小さくなっていた。時々北海道の旅行ではロマンスが生れるのではないでしょうか。私は温根湯温泉を後にして最後の旅、旭川に向った。途中層雲峡を車で通ったが多数の滝の美しさは言語に絶するものである。銀糸の滝は日本一の美しさであろうと思う。此の絶景の層雲峡を通り抜けて大雪山系を登り旅行の最終地旭川に五時前に到着した。北海道はまだ未開地の部分が多くあり日本の北端であるが、発達の希望を有する所であろう。こゝに私は旅行を終えたのである。再度機会があればアイヌの地にまみえたいと思いながら稿を終る。

× × × × ×

詩

ゆうぐれ

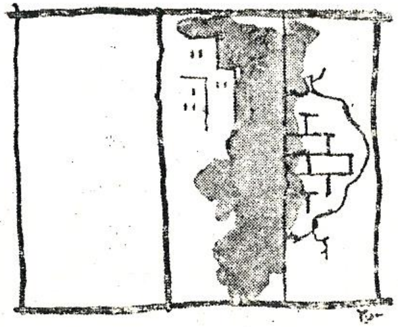
恭女

いちょう並木の間に
ところどころ灯がともつて
街も　ようやく　暮れてゆく

道路でたわむれていた
ひるまのざわめきは　空に消え

かすかに白さを残す
角ばつた　ビルとビルの向こうに
　あかね雲が空を色どる

一人のエトランゼが
ふと　足をとめ
郷愁にみちた目で
　ふり返つた



山小屋にて

森井時夫

　重たい足を引きずる様にして、小屋に着いたのが十時半を少し過ぎていた。顔さえもはっきりとわからぬ様な薄暗いランプの下で、ストーブを囲んだ山男達が話しこんでいた。空色のセーターをきた若い女性がひときわ目立つ。我々も疲れた身体で固い木の椅子に腰をおろし、空色のセーターの差し出すお茶を飲む。普通ならば飲む事も出来ぬ様な薄い、そしてぬるい茶でも、この時ばかりは充分にのどを潤してくれた。一息落ちついたところで室を見わたしたが、天井からランプが下がっている他は物置と同じ様です。隅の方に台所らしき流し台があり水瓶があり、棚の上に食器が並び、飯盒が壁ぎわにあるだけである。二階が寝室になっているらしく、寝返りを打つ人の動く気配がし、泊り客がいる事がわかる。

　少したってから空色のセーターをふくむパーティが出発した後には、我々が残っただけである。

　小屋番はまだ若い人で山の話をいろいろと聞かせてくれた。彼もこの丹沢をはじめ附近の山を歩いたが、その中で一番好きだったこの場所に小屋を開業し、それからずっと山へ籠り、小屋番としての生活を続けている事、小屋番の苦労がいかに大きいかという事を長々と説明してくれた。

　昔の丹沢山脈は、もっと自然そのままの原始林的で静かな場所だったが、今日のそれは、日曜日ともなれば表尾根等は前を登る人の尻を見ながらでなければ登れない程の混雑であり、これも県の観光課があまりに宣伝している為である。近い将来には、塔の頂上迄ケーブルカーが通る計画もあるそうです。そうすればスカートにハイヒール姿で登ってくる人も出てくるだろう。でも真の山好きの者は、あいもかわらず重いキスリングを背負い、一歩一歩登ってくるだろう。しかし最高峰の頂上に立った時の気持ちは、この人達にしかわからない事だろうと思う。山小屋にしても薄暗いランプの室は、自然に少なくなり、かわりにテレビ、ステレオ付のデラックスなホテルが続々と建つ可能性は充分にある。現に西丹沢の箒杉沢には県の経営するコンクリート建の大きなホテルが出来上り、たくさんの登山者に親しまれているという。

　この様に時代の流れと共に丹沢も、そして他の奥多摩、

奥武蔵の山も変化していくのではないかという事である。

　山好きな彼も今月いっぱいで山を下り、都会生活をするらしい。話しの内容によると、彼の兄貴が東京方面で町工場を経営しているそうで、会社としてはそれほど大きくないが、有限会社であるため、彼も重役の肩書を持っている。でもほとんど山に入っているため、会社の内容すらはっきりわからない様では、他の人の手前あまり良くないと兄貴にいわれ、しかたなしに生活を切替える事に決意し、今夜が最後の夜となり、親しい友達が彼の為にお別かれパーテイを何回となく開いてくれ、すっかりアルコールがまわってしまったそうです。

　我々が彼と話している時も額から汗を流した一人の若者が入ってきた。その人も昨日迄身体の調子が悪く床についていたが、今日の事を思い出しやっと歩いてきたそうです。話し方にナマリがあり地方の人らしい。話しがはずみ二人でいつ迄も話している。時間も大分過ぎたし明日長時間歩く事を考え、先に休ませてもらう事にして彼に案内されて二階へ登る。

　狭い階段を昇った場所は、座っていても頭がつかえそうな低い天井である。室いっぱいに床が敷かれ、たくさんの人々が重なって寝ており、我々の入る余地なしである。でも彼のいう事には「お客さん達には、一つのふとんに二人ずつ寝てもらう事になっているから、一人でがんばっている奴がいたら、遠慮せずもぐってくれ」との事、我々もいくらかの隙間を作って、足から少しずつもぐっていく。小屋が縦走路にあるため、夜中でも立寄る人々がいるので、下での会話が耳につき、ますます目がさえるばかりである。

　下で焚いているストーブの熱が上に昇り、狭い二階いっぱいにこもり、さらに身体を隣りどうし重ねあっているため、七輪の上のめざしの様である。額から流れ落ちる汗さえも、手の動きが不自由な為ふき取る事が出来ない。それでも、何処かですやすやとやわらかい寝息が聞こえる。こんな場所で簡単に寝つかれるのだからある程度神経が太くなければ出来ない事だ。下では相変らず、ガヤガヤと話し声が聞こえ、「もう三時になるぞ。」というのが聞こえた。それでも小屋の外では登ってくる人々の話し声がガラス戸ごしに耳につく。外はきっときれいな星空であろう。

僕とギター

佐藤隆則

僕は小さい時から、ギターの音色が好きだった。よく家へ遊びに来たSさんが、僕と妹を前に、僕等の喜こびそうな曲をひき、僕はSさんの踊る様に走る指と、その弦から流れるメロデイに、うっとりとしたものだった。

僕が自分のギターを手にしたのは、高三の二月、高校最後の試験が始まる一週間前だった。そんな時期にギターを買ったなら、どんなになるか分かり過ぎる程分かっていた。欲しくてたまらない時にお袋が下宿へやって来た。僕はお袋を説き伏せ、ついにさいふのひもをゆるませるのに成功した。雪がちらちら降り、風がいやに冷めたい夕暮、お袋と楽器屋へ連れだった。

僕はまるで小さな子供だった。ぴかぴか光るギターを手にし、角度を変え眺めまわし、まけてくれた教則本を開き、ドレミファソラシドをひき始めるのにしばらくかかった。始めてギターをひいた僕には妙な音が交じって素直な音が出てくれないのには弱った。弦によってはじく指が異なるので、押さえている弦とはじく弦とが一致せず、妙だなと思うと変な弦を押さえたり、違った弦をはじいたりしたものだ。押さえる指が痛いと思ってみて見ると、弦のために指がへこんでしまって、紫になっているのでびっくりして、手でそのへこみをこすった。

家での或る日、縁側で夢中になってひいていると、目の前で妹が、ニヤニヤして僕の顔を見ているのに気が付いた。口を歪めてギターをひいているのが面白いと言うのだ。

「何が面白いものか！」

と怒ってみたものの、お袋までが証言するのでは、やはり知らずに口をあっちこっちと歪めたらしい。でも弦

を押さえるのに、指がなかなか思う所をしっかりと押さえられないので、無理に力を入れようとすると、何の関係もない口までが、妙な力が入り滑稽な顔になるのは無理もなかろうと思う。本人は真剣なのに、その顔が滑稽になるとは皮肉なものだ。

春風のやわらかい日曜日、川縁の緑の土手に腰を下して、又、秋の真夜中、誰一人いないひややかな外でひいたりした。田舎へ帰る時は何時でも、あの混雑した中をかかえて行く。いろんな所で、さまざまな気持でギターを手に取る。けれどそれは何時も変わらない僕のギターで、その事が悲しくもあり嬉しい時もある。

奇妙なもので、しばらくぶりでひくと、ギターの音色が、何とも言えない程良く聞え驚く事がある。暫く聞かなかった自分のラジオの音質に驚くと同様に……。又調子を合わせる際、六本の弦がそれぞれわずかの調整で、完全に合ってしまうときと、なかなかうなりが残って合ってくれない時がある。弦を合わせるのに、調子の良かった時は、そうでなかった時に比べ、同じ曲をひいても不思議と指が良く走り、音も良く聞え、何時迄ひいても飽きないし、楽しい。

「今日は調子が良いぞ」

と言った暗示的なものもあるかも知れないが、それにしても、一本の弦ばかりが調子が良い、と言うのではなく一本が良ければ、他の弦もうまく合ってしまうから不思議だと思う。

通勤する様になってからは、日曜以外の日はほとんどひけないので一向に上達しないし、新しい曲を覚えられない。おたまじゃくしには弱いし、感が鈍いからなおさらの事だと思う。でも僕はギターが好きだし自分のギターが可愛いい。自分の好きな曲を自由にひける様になるには何年、いや何十年かかるかわからない。それでも良いと思っている。

×× ×× ×× ×× ×× ×× ××

×× ×× ×× ×× ×× ××

色彩

小川　翼

「日本の娘さんは白くぬりすぎる。どうしてあの美しい肌色を生かさないのでしょう」と東京に住むフランス女性が語った言葉だそうです。

その話を書いた若者は「私は歌舞技の役者や芸者衆の化粧を例にあげて、わが国の伝統がまだ、そこに強くはたらいていることを説明したが、フランス女性は舞台に出るときと、ふだんのお化粧は意味が違う、何も遠くから見える様に強調する必要はないといって否定されてしまった」と書いている。

この話は「色彩論」の中にのっていたのを拝借したものであるが、女性が化粧室で顔にいろいろなものをぬっているものが色彩学者の方で論じられているのを知ってか、知らぬか、毎日念入りに化粧をしているのがお可笑いぐらいである。

又一般に日本人の顔色が悪いといわれるが、それは黄色人種の宿命なのか！それでも若い学生や朝の日ざしを受けて歩いているサラリーマンの顔色には気持ちのいい感じを受ける。

この日本人の肌のうつりの良い障子、唐紙、砂壁、ふつうの壁、畳といずれもクロマ(Chr oma彩度)の低いので抑えて、これにしら木で直線の枠をはめた室内は私達日本人の肌色をもっとも生かしたもので、うつりのよい環境である。又白い壁、緑、青、ピンクの色壁の洋間ではとかく色あさぐろく見えてしまう事が多い。

私達が町を歩いていても、日通の様に黄一色に塗りつぶした自動車が、遠方から疾走して来てもすぐに目にとまる色や、現在の中央線、山手線の電車が茶色の車体から明るい橙色、淡黄色に区分したのは路線区分だけではない。この明るい色彩によって私達通勤人が精神的に明るいさわやかな雰囲気を取り戻す事ができ、又警戒色と

もなっている。

又私達の職場にも色彩調節は必要である。

現在、工場の中にイエロー・ラインが引かれ、消火器には赤色が塗られているが、もう一歩進んでやってはどうか。

室の中の明るさを規定通りにとり又、工場の中ももちろん全体的に規定の明るさを取り、危険なモーターやその他の所を警戒色に塗った実例の結果、

○明るくなって仕事がしやすい。

○安全感がまして気持がよい。

○整頓、機械の手入れがよくなる。

等プラスの面が出たそうである。まだ生産能率の上昇、事故の減少などの数字はわからないが、何よりも仕事がしやすい環境になる事はたしかである。

新工場の建設等機会のある事に理想の環境を作ってもらいたいと思います。

××××××××××××××××××××××××××××××××××××

友人

土岐　武

暑さも幾分やわらいで、秋風の吹きはじめる頃、私は一通のハガキを受取った。残暑見舞かと軽い気持で読みはじめたが、これはおどろいた。高校時代のクラス委員からのもので、不幸にも級友の一人が死亡したという知らせであった。原因は八月の暑い最中キャンプに行き水に入って、心臓麻痺を起して――、詳細は後便でと云う。あゝ、やったな！と思うと同時に自分にも、この夏の場面が想い出され、我が身の安全だった事を喜こんだ。

それは七月の末に品川区の青少年団体の行事として奥多摩にキャンプをした時。目的地について一行は満員の電車にゆられ、強い日光に照らされて全身汗にぬれていた。若者ぞろいだけに、目の前にある谷の急流に見とれただけでは物足りなく、すぐ用意の海水パンツを取り出して行水としゃれこんだ。私も夏バテをしていたが周囲の状勢に負け、女性の見物もある程度意識して谷川に入る決心をした。今まで泳いだどの川よりも流れは早く、一度両手で水をかくと四、五メートル下流へと飛び、スピードとスリルは充分に味わえたが、さて、もう岸に近ずこうと思い体を横に向けようとするが水の力が勝っている。岩のつき出た個所が目前にせまってくる。私はいそいで浅瀬をさがすのと同時に、手は川底の岩をつかんでいた。流れがはげしいので同じ場所には停っていられないし、岩もろとも下流に押しやられる。頭一杯に水圧を受け体を二転三転と寝返りを打ち、やっと岸にたどりついた。ひざ頭には数個所血がにじんでおり、吊り橋の上からあらためて多摩川を見おろすと、自分が無茶にも地形を知らず泳いだ事に恐しさを感じると共に準備体操を充分にやっておいて良かったなあと思った。

こんな事を考えながら、家人にもハガキを見せ深く水遊びについて反省するのでした。

九月の始め、三年間共に机を並べた同窓生有志で墓参りをしようと相談がまとまり先生を含めて十六人が集り彼の住んでいた相模原市に向った。タバコの煙のあちこちに上る横浜線の車中では、級友達が三々五々席を取り各々の会社、身辺の出来事の雑談で過した。相模原市は養蚕で有名ですが最近は工場が進出し衛星都市化しつゝあり、中央を走る道路は升目のように整備され、広々とした農地が連なり、今後の発展が充分期待されます。直線道路を駅から歩いて十五分位の所に集団の県営住宅があり、その南側に周囲をまさ木とスギの木でかきねをした友人の家がある。家人は所用でおられず大学二年生の弟さんが留守番をしていた。室内に通されると、まだ木の香新しい位牌と元気な時の学生服の写真が目にとまり何か話しかけてみたいような、又どうして無茶な事をやって死んだのか、おこってやりたいような感じがした。まだ大学を出て今年就職したばかりでやっと御両親も長男が社会に出てほっとした矢先に、この不幸とは何と悪い運命のいたずらだろう。本人も兄弟四人で仲良くこれ

から立派な社会人になる事を望んでいたゞろうに!

線香を上げながら級友達も何か胸の内に考えたろう。

静かな時が過ぎて一同友に別れを告げた。

帰り道は各人の心は日曜の気分になっていた。卒業して五年目、すでに世帯を持っている者、恋の進行している者、自家用車に乗る者等大部変化が多く、それぞれ自分の事に精一杯打込んで成長している。我々は実社会にこれから何年か生活していくが、彼は我々に何と云うだろう!

雲の話

島倉昌二

ここで一度都会のゴミゴミした下界から目を外らし、上界即ち、空に浮んでいる雲に目を向けてみよう、と云っても、東京の空は相当空気が汚れているため、雲も本来の美しさを見せず都会人には、それほど雲には関心がないのではないかと思うが、カラッと晴れた空に浮かぶ雲、夏の空を飾る雲、秋空に浮かぶ雲、雨あがりに浮かぶ雲、又あの白くなびいた雲、ときにどす黒く、ときには赤味を帯びた雲、これらの雲は幾世紀もの間、どれだけの安らぎ、不安、そして驚威を与えてきただろう。

私が雲に興味を持つようになったのは、確か小学校四、五年生の頃だったと思う。よく田んぼ道とか、川の土手に座って雲を眺めたものです。あのころ私は、二年間ほど毎日雲の観察を続け、その頃から雲、雨、雪、雷、風等に興味が引かれ、学問上から云うと気象学に入るが、

今でも、これが続いています。

私の故郷は、富山の田舎であるが、空は都会に比べて澄んでいて、雲も、あるときは女性のように美しく、又あるときは猛威をもってその赤裸々な姿を見せてくれ、人間一生のようにいろいろとその姿を変えていくことに興味を感じているのである。とくに今でも忘れられない雲は、青く澄みきった大空に、空の一方から他方へ真直に、あるときは曲線を描いて数条あるいは数十条の美しい櫛ではいたような筋雲となって走っている雲でした。

又夏のギラギラとした空のシンボルであるあの雄大な垂直に発達した入道雲も忘れられない雲です。

綿のように真白で、潔白な感じのする雲、この雲の出た後には、きまって彼の有名な『田園交響曲』にも出てくる雷鳴を呼び起すのである。これが今まで明るかった空を暗黒の空へと変えてしまうのである。しかしその雷鳴も終り、今までとうって変ったすがすがしい空、雲、これらを見るとなんとも表現しがたいものがあり、思わず自然現象の偉大さに打たれるのである。

ところで雲には、気象学の教えるところでは、その型、浮かぶ高さから分類して、一〇種類の雲に分けられています。上層から巻雲、巻積雲、巻層雲、高積雲、高層雲、層積雲、層雲、乱層雲、積雲、積乱雲です。

巻雲、巻積雲、巻層雲これらは最も上層に属し、高さにして平均六キロから十一キロメートルであり、青く晴れた空に、繊維状の筋雲、はけではいたように見える雲まだら模様の雲、うす雲等がある。これらの雲は最も美しさを示し、こんな雲の出ている空の下で若い二人の恋のささやきは清く美しいそのものであろう。

高積雲、高層雲これらは、高さにして平均二キロから六キロメートルで、牧場で羊が群がっているように見え一名羊雲とも云われ、又うすぐもりのとき出している雲で、月の晩には、よく詩歌に読まれ唄われているおぼろ月となる雲です。この雲が出てくると、そろそろ雨の近きを知らせていると思ってよい。層積雲、層雲、乱層雲これらは高さにして、地表近くから二キロメートル程でくもり空に出る雲、登山された方は経験されていると思

うが、キリがかかるときの雲です。乱層雲これは、我々にあるときは恵みとなり、あるときは生命をも断たんとする暗灰色の雨雲です。

積雲、積乱雲は高さにして、平均五百メートルから十一キロメートルと垂直に発達する雲で、夏の空を飾るあの上部がドーム状で、下部がほぼ水平となってむくむくとした真白な雲である。これが著しく発達したものが、積乱雲で一名かみなり雲（入道雲）と云われ、上部は山の峯のように起伏し、又かなとこ状に広がることが多くこれが全天を覆うと空は暗黒となり、ピカ・ドンが始まることが多い。

雲はどうしてできるかと云えば、太陽のエネルギーによって、水分が空気中に水蒸気となって含まれ、これが上昇気流に乗って上空で断熱膨張で冷却され、水蒸気が凝縮して折出したもので、上層の白雲の世界は零下十度あるいはずっとそれ以下の寒い大気に充ちていて、あの巻雲、巻層雲、巻積雲、積乱雲の上部層は水滴は存在しえなく、氷晶となって浮かんでいるのである。他の雲は水蒸気が微細な水滴となって浮かんでいるのである。

雲を見ていると雲の形が非常に多く、やっと十種類にしか分類されていないのかと疑問を持たれると思うが、しかし雲の型から云えば、東京でみようが、外国でみようが、雲は同じで、又浮かぶ高さにしても低いところに生じる雲は高いところに生じ、高いところに生ずる雲は低いところに生じると云うことはないので、あの一見、ふわふわと浮かんでいる雲、環境に動かされやすい雲でも、自分の存在しうる場所には存在し、あるときは笑顔で、又あるときは怒り、そして泣き、雲の一生は我々人間の一生に似たところがあるのではなかろうか。

後楽園の土を踏んで

野球部　30番

われら野球をするものゝ憧れは、後楽園グランドで公式戦をすることであろう。

この時期がついに来た。都内各区代表百余チームと共に覇を競うことゝなり、憧れの後楽園においての開会式にわが明石製作所チームは参加することゝなった。昭和三十七年七月三日である。チーム結成以来実に七年目の壮途である。自衛隊ブラスバンドの演奏の中を各チームに交わりグランド内を大パレード。そのパレードは長く続き晴ればれしいものであった。

全員整列が終り力強い大会の開会宣言。ブラスバンドは高らかに「君が代」を吹奏、国旗はスルスルと昇る。頭のテッペンから爪先までじーんとしていった。思わず足下の土を両手でコネてみた。ゆっくりと……。二、三年以前であったか『全国高校野球大会に出場した沖縄高校チームが甲子園のグランドの砂を持ち帰えった』とあったがこの感激を身をもって体験した。

この大会は全日本軟式野球大会東京予選であるが、本大会参加チームは各区優勝チームである。明石チームは品川地区大会において強豪二十四チームを撃破、第一試合を五対四、第二試合が六対二、準決勝五対二、ついで決勝戦を七対三と破り、優勝しての出場である。

大会での結果は、第一試合を三対一で勝利を握り、第二試合である準々決勝は三対五にて涙を呑んだ。

明石製作所チームの戦力としては（グランドもなく練習量の不足を思えば）よくこゝまで来たものである。実力を出し切っての戦であり悔のないものであったと思う。いずれにしても敗戦は気分の滅入るものであるが、本大会参加について物心両面に御配慮をいただいたK次長が出発にあたり「参加することに意義がある」との激励の言葉が大いなる慰めであった。

大会の試合経過について詳く説明してみると、第一戦はグランドを亀戸球場に移して行なわれた。三対一で勝った相手は新宿区代表である総理府統計局チームであった。全員が日やけで真黒であり、それにも増して真黒な監督が目をギョロつかせていたのにはギクリとした。これに対称的な青白き顔色の明石チームであった。

野球を見るものゝ醍醐味は、ホームランかヒットを集中して得点することであるが、これはよほどの自信と体力、それにも増して素質がなくては出来るものではない。明石チームの如く身長に体力に又練習量に劣る場合は各人の自信は余り望めない。ホームランや目の覚めるようなヒットを期待するのは無理である。然し野球はチームプレーである。即ち各人の力を充分に発揮出来る様にすることである。チャンスにはあらゆる手段を尽して得点する。例えば出塁する（ヒットであっても敵のエラーであっても）このランナーを盗塁又は送りバンドでしゃにむに三塁をもぎ取る、そして次にスクイズにて得点する。このファイト戦法で十割成功したのがこの第一試合である。全得点をスクイズでもぎ取ったその得点経過は左の様である。

明石	010	000	101	3
統計	000	010	000	1

明石　木村、中村—南雲。統計　中野、平野—酒井

こゝで特記すべきことは、作戦をかくも成功させたのは各個人の力がその大部分を左右すると言うことである。スクイズが出来るのも自信によるもので、これは練習に

よってのみ得られる。わがチームは昼休みのわずかな時間に、又定時後はボールが見えなくなる迄練習をした。その成果が実を結んだものと声を大にして叫びたい。又敵の得点を最少限に押さえたことも練習による各人の連繋動作がスムーズに行なわれたことによるもので再三のピンチを未然に防いだ。特に五回の反撃期に、あわや逆転の大ピンチに内外野手の連繋動作は見事一点におさえた。

かくて第一戦を完勝した明石チームは息つく暇なく翌日は墨田区代表の強豪アサヒビールと対戦することゝなった。当日は朝から暑く、前日の疲れが抜け切られてないせいかグランドに陽炎が上るような日であった。相手チームは歴戦の強者らしく、がっちりとした体格でありその上、上背あるチームであった。試合中二十分程トラブルがあったがスコアーは左の様である。

アサヒ	000	000	005	5
明石	001	001	100	3

八回終って三対〇とリードしており、投手は木村、中村と継投して現在の中村投手は速球をアウトコースにビシビシときめて快調そのものであり、勝利の喜びがふっと目先きにちらついた。何か気の抜けた様な空虚感が走った。思えば、この時勝利の女神に見放されたのかも知れない。この時の試合の批評を『社会人スポーツ紙』は次の様に書いてあった。

『明石製作は墨田の元A級に対し八回まで三—〇で押していたがアサヒ九回表、二死満塁で押し出し、ついで三ゴロしたのがハンブルして二点、さらにアサヒ島田の左越え三塁打で一挙に逆転されたのは惜しかった。』九回表の二死満塁になって明石チームの楽屋裏は語るも涙である。この回迄快刀乱麻バッタ〳〵と打者を薙倒した中村投手が疲れが出たかボールが浮いてきた。これ迄「間」を取るため再三タイムをかけ引延し戦に出たが一度坂を降り出した車は止まらない。やむを得ず一時休ませる作戦とうまく行けば押えるつもりで井上君に投げさせた。しかし投球練習は全然やっていない彼は四球を出して又中村君に交替した。この時迄明石チームは一点リードしていた。この直後大三塁打が出て走者一掃された。こゝで又木村君にスイッチしてやっと、終止符を打った。但しこの回だけで五点という今迄にない大量点を失った。かくてこの試合に投げた投手は、木村→中村→井上→中村→木村と如何に苦しかったかを物語っている。然し攻撃についてはこの試合はスクイズにて一点。ヒットエン

ドランにて一点、敵の判断をあやまらせて一点と確実に得点していった。この得点方法は作戦通りであった。九回裏のエラーも疲れが出たためのものであり、（相手チームにも条件は同じであるが体力的に又練習不足にハンデイがある）このスタミナをチーム全体につけること、投手の層を厚くすること、又大物打ちの養成が明石チームに課せられた課題でありましょう。

いずれにしても、「こゝ迄やれた」と言う自信はチームにとって大きい力となるであろう。そして秋の大会、試験機工業会の試合にこの経験をよく生かして戦うことでありましょう。野球部員よ大いに頑張ろう。

さてつたない報告を終らせて頂きますが終りに本大会出場について会社におかれては出場の許可をされ、その上物心両面にわたり絶大なる御援助を頂き感激致しております。又各課各班におかれても色々と御配慮を頂き気持よく出場させて頂きましたことを厚くお礼申し上げます。特に試合中に慰問品をお届け頂いたV課長その他御激励頂いた方々に厚く〳〵御礼申し上げます。

最後に連日暑い中をベストを尽して戦った野球部各位に厚くお礼申し上げます。

広告

アカシ・ダンス・クラブ

ダンスクラブ発足以来八ケ月、月二、三回の定期レッスンと二回の親睦パーテイを経て、これからより一層の充実したクラブにと念じておりましたところ、此の度の相模新工場発足と共に、当クラブの会員の方々始め幹事の少なからずの移動により、今後この様な定期的な会を持つことが不可能となりました。こゝで残念でありますが、一応当クラブを解散することに致します。短期間ではございましたが皆様の御協力をこゝに深く感謝申上げます。なお、晩秋の夕べの一刻を皆様と共にさゝやかなお別れの会を持ちたく、左記の如く御案内申上げます。お知り合いの方々をお誘い合せの上多数の御来会をお待ち申上げております。（申込みは幹事又はクラブ会員迄）

お別れパーテー

とき　十月三十日(火) 午後七・〇〇—九・三〇

ところ　荏原児童会館（池上線　荏原中延下車　徒歩五分）

かいひ　百五十円（演奏はサウス・シー・アイランダース）

のぼろう会

秋沢　昇

秋も深々と深くなってきます。

本年は日本火山帯の爆発期に入っているそうで、日一日と山が変化をしてゆくが、変化する山の噴火前と後を見たいという人は少なからず興味をおぼえるのです。こんな時世にも山の好きな者が集まって、山で歌いかつ冗談を言いながら歩くのは楽しいものである。

当のぼろう会の夏のキャンピングの報告を致します。

七月二十一～七月二十四日迄、三泊四日の白樺湖キャンピングが行われました。参加者八名と大人数であった。

湖畔の前に霧ケ峰を、後には蓼科山を仰ぎながら、湖畔にたわむれる若者達は新鮮な空気を吸っているせいか生き生きとして見える。二日目は全員にて蓼科山（二千五百三十米）をきわめた。前方に八ケ岳、後方に北アルプス、南アルプス、中央アルプスと三百六十度の展望である。三日目はM氏休暇がないので湖畔を去り、車山を通り強清水へと下るので残留者は車山まで登りM氏と別かれる。

車山迄の道を日光きすげの黄色い花に囲まれながら歩くのはとても楽しい。

朝の湖畔は霧がたちこめて、夏でも十度内外なのでセーターを着る。湖畔の早朝の釣りはぶよにくわれながらも十五センチぐらいの鮒を大分釣りました。

キャンプの楽しさは夜にキャンプファイヤーをたき、手拍子合わせて歌ったりゲームをする事にある。

四日間を通して雨がほとんどなく、そのため全予定を無事完了し、かつ楽しく夏の休暇をすごす事が出来ました。

××××××××××××××××××

あかし天狗倶楽部開催記

××××××××××××××××××

食事休みにでもなにか一般に楽める娯楽はないかと思い人事課に相談援助を得て又明友会の後援も得て第三回将棋連珠大会を開催する事になりました。

たしか第一回は昭和三十一年と思います。第二回は三十四年でした。将棋では第二仕上の内田君、連珠では検

査の本多君がそれぞれ優勝しました。

各課、班より希望出場者を募り、われこそは大天狗なりと名乗りをあげた者将棋五十名、連珠三十八名となりいよいよ五月二十八日決戦の幕をあけました。

熱戦に次ぐ熱戦

出張者やその他の都合で延々七月、次の優勝戦出場者を迎えました。

将棋の部	連珠の部（略敬称）
鈴　木（営業）	神宮司（営業）
三枝枝（営業）	伊　藤（設計）
井　田（設計）	橋　（設計）
岡　本（三仕）	本　多（検査）
近　野（三仕）	宮　田（検査）
田　村（機械）	大　野（二仕）
藤　森（機械）	内　田（二仕）
六　川（機械）	六　川（機械）
遠　藤（機械）	片　岡（二製）
掛　川（倉庫）	大　木（電気）

以上の諸氏に決定しました。

八月十九日、明石クラブにて一位―十位までの賞品山積の上優勝戦の火蓋が切られました。

当日台風の影響もあって不参加もありましたが、終日決戦が続けられ、午後三時優勝者が決定しました。

将棋の部		連珠の部（敬称略）	
優勝	遠　藤（機械）	優勝	片　岡（二製）
二位	井　田（設計）	二位	内　田（二仕）
三位	六　川（機械）	三位	宮　田（検査）
四位	田　村（機械）	四位	伊　藤（設計）
五位	掛　川（倉庫）	五位	六　川（機械）

以上の諸氏が決定し、以下省略します。

前年度の優勝者に代り又新しい明石将棋連珠名人が生まれました。

最後にこの開催に御協力下さいました諸氏に御礼感謝を申し上げます。

×　×　×　×　×　×　×　×　×　×

人事往来

三十七年六月二十日より
三十七年九月　一　日まで

◇入　社◇　皆様の御活躍を期待致します

石森智枝様　営業部業務課
中島正夫氏　大阪営業所
福尾信平氏　技術部研究部
橋本美智子様　研究部物理研究課

◇海外出張◇　大変御苦労様です

小林敏之氏　米国駐在勤務　六月二十五日—約四ケ月間
栃木　弘氏　米国　八月十六日—約二ケ月間
小野口彰氏　米国及び欧洲　八月十六日—約二ケ月間
白井省吾氏　米国スタンフォード大学　八月二十一日—約一週間

◇結　婚◇　永遠に御幸福でありますように

角木庫一郎氏　昭和三十七年九月二日

◇出　産◇　すくすくと御成長されますように

湯本富夫氏　長男　昭和三十七年七月　六日
福田正幸氏　長女　昭和三十七年七月二十六日

◇忌　引◇　心からお悔み申し上げます

佐藤昭七氏　実父　昭和三十七年六月二十四日
星　勝正氏　養父　昭和三十七年七月十六日

編集後記

天高く馬肥ゆる秋、と歌われた言葉を遠い昔の形容詞のように感じられる今日今頃、都会の汚れた空気の中にも涼しい秋風と共に昨日の暑さも忘れられるような時季となりました。我々が選ばれて「あかし」の編集を受持ってから早くも一年の月日が流れ去り「あかし」も号を重ねて、その内容も少しばかりは進歩した様に思うのは編集子達の自惚れかもしれません。

何時も何時も口角泡を飛ばせての反省のくり返しの一年間でもありましたが、沢山の投稿者の皆様には厚くお礼申上げます。どうぞ今後共宜敷くこの雑誌「あかし」を育てゝ行くために善導あらん事を望みます。

一編集子の感じたまゝを一つ書いて今後えの希望の一つともなれば幸いと思います。「あかし」の編集業を振返ってみて、少々その内容が薄い事が気がかりでならない。どうも文芸文、紀行文、古き良き時代えのノスタルジック文、或いは小説的文、等が大半であった。

これらも大変良いものが沢山あります。もっともっと我々の身近な問題、例えば人間社会の実生活記録、家庭生活と社会生活、人間性の尊厳、精神文化と物質文明、社会悪と個人の善業、等……　平たく言うと、自分達の日頃の生活面での色々の出来事が沢山ありますからそれらを自分で感じたまゝ、或いはそれらの出来事えの心がまえ、仕事面での苦しみ、楽しみ、ボーナスの買物プランの紹介でも、月給が少ないので結婚しても共稼ぎしなければ生活が出来ない社会、合理的な生活設計、人間は如何なるものであり人間と物質との関係等。

まあーまあー、書いていたらとめどもなく続きそうですね。要するにもっと自分の見たまゝ、感じたまゝに書いてみて下さい。きっと良い作文となりましょう。

自分の身の廻りの事柄等なら割合楽に書けるものです、一度試しにペンを持って下さい。そしてどしどし投稿して下さい。今迄は編集子の三拝九拝して戴いた原稿ですから大切にして一言半句も減らしたりなどしないで一頁でも多く、厚い本となる事だけを念願として、又実行し

て来ました。
今回の内容もどうぞ御批判を聞かせて下さるよう希望致します。そして一年一年進歩したいものです。
この一年間は丸の内本社の移転、新相模工場の建設、又これに共なって成長した我が社の体質改善の大人事移動等変化の多い事でした。それから経済状態の悪化など明るいニューズと暗いニューズのミックスには少々味が悪い近頃ですが、それだけに投稿内容も多彩化する事と思います。
これからも今以上に「あかし」を通じて親睦の書とも、友愛の書ともなり、又もう一つ慾張って知識の書ともなればと念じています。どうぞ編集子泣かせをしないで、どしどし御投稿のほどを望んでいます。

× × × × × × × ×

「あかし」　第二十三号（非売品）
昭和三十七年十月二十　日印刷
昭和三十七年十月二十三日発行
編集兼発行人　「あかし」編集委員会
発行所　品川区東品川五の一　明石製作所明友会
印刷所　世田谷区下馬町一の一二一　新青社印刷所